『貴女は私を追出すんですか。』
『奈何して〳〵、妾は些とも其麼事爲やしませんよ。』
『何故其麼に私には酷いんです。』
『何が妾が酷くつて！』
『男が貴女を待つてたんだつて、其麼事を私に知らせるぢやわりませんか。』
『だつて妾が孤獨で入るには立派に所以があるのに、夫を些と見て悅んでゐるのが可笑しくつて堪らなかつたんだもの。』
『人といふものは小兒のやうな極滿らん事に娛樂があるものです。如德のは其儘に置いてやれば、或人は大層悅んで居るものを打壞すといふのは實に酷いです。』
『が卿妾を何と思つてるの。妾は生娘でもなけりやあお姫樣でもなし卿の知己になつたのは今日が初めて。是迄甚麼事を爲やうと別に卿に苦情を言る理は無んですよ。もし早晩私が卿の情婦になるとすりや幾人も情夫の在た事は、よし卿が厭だつても知らなけやならんのですよ。卿の樣にならん前から左樣妬き初めるんぢや、なつた後といふ爻にもし早晩なるとすると、其時は奈何するんだらう。妾は生れてから卿の樣な人に逢た事ないわ。』

『夫は是迄誰も私の樣に惚れた男が無いからです。』
『夫ぢや正直の處卿眞面に妾に惚れて居て？』
『此上惚れ樣の無い丈惚れてゐる意。』
『夫は何時から。』
『貴君が株式取引所の處でシュッセの店へ往つたのを見た時、丁度三年前から。』
『まあ眞箇に嬉しい事ね。其代りにはどうすりや可いんだらう。』

『少し私を愛して下さいよ。』

露子の方では對話を爲る間始終幾らか嘲む樣な笑を爲て居るものゝ、奈何やら自分の情に絆されて此感情が染つて來た樣子、自分の待ちに待つた其時が近付いて來るやうに思はれたものだから、自分は殆ど語も言へぬ位に動悸が劇しく搏つて居る。

自分の鑑定は當ッたらしく、彼は自分を愛する事には異議も容れず、直に恁う言ッたのである。

『然ねえ、だが公爵は。』

『公爵とは。』

『家の嫉妬家の老爺さ。』

『夫には秘密にして。』

『萬一知れたら？』

『知れたつて宥して呉れるでせう。』

『却々奈何して、お拂ひ箱さ。然すりや妾は如何なるだらう。』

『貴女は其麼事になるのも承知なればこそ代人が拵へてもるのでせう。』

『何故其麼事が知れて？』

『今晩誰も入れちや可ないッて言ッたぢやありませんか。來る人がなけりや其麼事言はなくッても可いのです。』

『其は言つた事は言つたわ。だが來るッたつて那の人は嚴肅なお友達よ。』

『左樣でございませう。まじめなお友達でございませう。爪の垢ほどもお氣に掛らないのでございませう。ハイ其樣方ならば今時分光來る譯もなし、光來つた所で、差支ないのでございませうが、併し、ま、左に右入れまいッて戸をお閉めになつたので

ございますね。』

『だッて其で妾を責めるのは誤ッてゝよ。卿を御馳走する爲だもの、卿と五姓様とを。』

自分は少しづゝ露子の傍へ居去り寄つた。たわゝな百合の花の體は自分の兩手を杖柱魂其様へ〜とばかり。

『甚麼に私が惚れてゐるか、此心が知らせるものなら！』と自分は彼の耳へ呟いた。

『卿、眞實？』

『神にかけても。』

『ぢやね、妾が言ふ事は直に諾と言つて、理由も訊かず、可否も言はず、何でも爲るといふ約束を貴公が爲れば、偶とすると私諾といつてよ。』

『屹度貴女の思ふ事は何でも爲ます。』

『前以て斷つて置くわ。可い事、何でも爲たい通り、何も斷らないで勝手に爲てよ。實はね、妾前から若い情夫が欲しかつたの。壯くつて、我儘を言はない、で、何でも信じて、妾を愛して、そして默つて、妾に可愛がられて居る樣な人。けれども此まで一人も見た事なし。男はね、長い間望で居ながら終に手に入らうとも思はなんだものが、手に入ると、結搦とは思はないで、情婦にせッついて、今の事昔の事、將來の事まで詳しく言はせやうとするの。而して馴染んで來ると、段々亭主風吹かしたがつて、女の方で與れば與る程、餘計に取らうとするやうになるのよ。もし妾が今情夫を作へるんなら其男は三つ稀らしい質がなけりゃ可ないの。第一妾を信じて、それから妾の言ふ言を聽いて、そして、たしなみが深いつて事。』

『よろしい。一切貴女の仰有る通りにしませう。』

『どうだか其内に知れるわ。』
『其中とは何時。』
『も少し先よ。』
『なぜ。』
『何故つてね。』と自分の手から其身を退けて、赤椿の大きな束の中から一輪の椿を把り、之を自分の釦の穴へ挿した。『何故つて約束證文の出來た日に取引の出來るのは稀らしいんだもの。』と笑つて居る。有繋に此意は自分にも難なく解せる。で自分は再彼を抱締めながら。
『すると此次何日會へるんです。』
『此椿の色が變る時。』
『夫は何時？』
『明日の晩十一時から十二時迄の間。其で良くッて？』

『と問はなけりゃ解らないの？』
『五姓田樣にもおてるにも、誰にだッて、此事を些とでも言ふんぢやありませんよ。』
『誓文します。間違なし。』
『夫ぢや、さ食堂へ歸りませう』と二人携へて出た。彼は諾を唱ひながら、自分は夢幻に彷徨ひつゝ。
次の室で彼は一寸停て、低聲に自分に向ひ、
『一寸口說いて、直に解くなんて卿には妙に思はれるかも知れないけれど夫はね、』
と自分の手を把て、動悸の酷く、急なのを知らせやうとか、夫を己の胸に當てさせながら、
『夫はね、妾が他の人の樣に長生しないからなの。そうして私も早く死ならうと覺悟したからなの。』

『どうぞ私に其麼事は言つて下さるな。』

『否卿は安心� ものよ。妾の壽命は短かくッても、卿の惚れてゐる間よりは長い事よ。』と笑ひながらいッて、又陽氣に諧ひながら食堂へ這入つた。が茲には五姓田とおてる二人限なので『お夏は』と訊ねると、おてる夫人が、

『貴女の寢るのを待ちながら、貴女の室に寢てゐるわ。』

『可哀想に、毎晩寢かさないで。眞箇に妾は那の子を殺しちまうよ。さ貴君方もうお歸り下さい。』

十分間にして自分と五姓田は暇を告げた。露子は自分の手を握つて名殘を告げたが、おてる夫人は後に殘る。

『時に』と自分等が街へ出ると五姓田は口を開いて、

『君は露子を奈何思ふ。』と問掛ける。

『他は天使だね。僕は惚れて了つて宛で狂氣さ。』

『だと思ッてたんだ。で他に然言たの？』

『言つた。』

『諾と言つたかい。』

『否。』

『おてるとは違ふな。』

『ぢや他は色よい返事かね。』

『それ以上さ。可愛い奴よ。君は然思ふまいが、餘り見限つたものぢやないぜ。他だつて昔は花さ。』

（十一）

茲で有馬は一息吐いて

『少し寒くなッて來たですから貴君窓を閉て下さいませんか、私は失禮して寐ますから。』

何堀躰は眞正でないので餘りの長談話に過ぎたのと昔の

憶出に甚く弱つたのであらう。若物を脱で床に入り少時枕に首を擡せてゐる。

『餘り談話が過ぎたのでせう、今日はゆッくりお眠みなさる方が可いから寧そ私は歸りませう。お話の殘餘は又此次に伺ふとして。』

『貴君もうお聞き草臥ですか。』

『否決して。』

『夫ならばお聞きなすッて下さい。貴君がお歸宅になッても私は嫌られは爲ないのですから。』

心には事の經緯が昨日の事の樣に歴々殘ッてゐると見えて休んで考へる迄もなく直ぐ又續けた、

家へは歸ッたが床へは這入らず、今日の事を想起して試た。遂ッて紹介されて、露子が約束したなど、變化の早い事、唐突だ

事、夢ではないかと疑ふ時もある計、併し那の類の婦人なら口說かれた夜の曉方に、早や得心して約束する抔、今に初めぬ事である。と又思ひ直す、其後から、依然見初めた心の深さに、奈何しても彼を普通のそれしやとは違ふ樣に爲ねば我身に承知が能ぬ。其上に誰にもある自惚で、我が惚れた通り先方でも思つてゐるだらうと、つひしては思ひたくなる。然るに眼前反對の證據は澤山あるので、時候次第で高下こそあれ、金さへ惜まねば露子は誰でも情婦に出來るとの噂は始終聞てゐる。併し若し其噂を眞實とすれば、那の若殿を振り拔いてゐるのは那は奈何した事だ。或は伯は虫が好かんからで、今の處公爵から充分の手當が來るから、若し他に情夫を有つなら、氣に向いた人を擇るだらう、といふかも知れぬ。さらば金が有て、才が有て、人好のする五性田を何故採らない。何故初めて逢ッた時變な

人だつて爪彈きした自分を採つたのだ。此處が聞き所。

尤も一分間の出來事で、一年中秋波を送つてゐるにも優した効驗のある事もあるもの。那の晩、食堂に居た者の中で、彼が卓を離れた時、心配したのは自分一人。跟いて行つて先方の眼にも留る程心配して手に接吻した時泣いてゐた。是と二月の病氣中、毎日見舞に行たのとが一つになつて、從來見知合の男と仕質が違ふ事が知れたのかも知れん。從來度々他に許して今では既何でもなくなつた位だもの、是程の戀なら得心した方が必然善からうと思つたかも知れぬ。

なぜ如斯推論は眞實らしくなかつたが其理由は何だつたにしても左に右彼が得心した事だけは確實である。さらば此上別に彼に求める處は無く大得意でなければならぬ。けれども人は妙なもの、彼が金錢づくで自由になる圍者であるにか

かはらず幾分か詩的な戀にする意で――此戀は失敗の糊ぢやないかと將來を案じ初め、此上望む所の無い時刻が近寄れば近よる程更にあやぶみ出して徹夜まんじりとも爲ず終。

我は殆んど我を知らず全で半狂亂、那程の女の情夫になる丈の金もなければ風采もなし、と思ふかとすると又思ひ返しては自惚れる。少時すると露子の情は眞の四五日丈の出來事なので直ぐに別れねばならんのだから寧約束通り行かずに手紙で此氣懸を告げて棄て了う方が勝矣とも思ッた。又其次は限なき情を得、何處々々までも信用し眞實とは受けられぬ將來を夢に見て、彼は我がお庇蔭で精神も軀躰も直り、兩人一生添い遂げる其の面白さ樂しさは奈何な乙女の戀よりも遙かに上。など次から次へ起る千々の思を一々詳しく言ふ事は到底能ぬ。何しろ夜明になつて漸と寐る迄思ひ續なんだもの。

二時に覺めると天氣はから〳〵と乾き切つてゐる。凡そ世の中が今日程に美しく、希望に滿ちたらしう思はれた事曾てなく、前宵の事を憶起しては心に一點の憂なく更に來ん夜の希望輝き渡るので戀と歡に心は胸にびく〳〵躍り、嬉しさの電氣は颯と總身を通つて行く。既う前宵の樣に理由も何も思つてゐる暇はなく唯結果を思ふ計りで、心は今晩逢ふ時はと其事計り、望の樣な小さな所では我幸福を容れるに足らず、奈何しても我を容るゝには全宇宙でなくば狹い。堪へ切れず、に戸外へ出て、安丹街を通ると露子の馬車が門前に準備して待つてゐる。之を斜に見ながら通り抜けて極樂街の方へ行たが逢ふ人も〳〵も可愛い人ばかり。戀は人を善人にすると見える。マリーからロンポアンへ歩行いて來ると彼方に露子の馬車の影、自分には神の出現かとばかり驚く、拜まん程の心地

極樂街の角で馬車が停ると其處に集つて話をしてゐた一群の中から青丈の高い男が露子の側へ來て暫時對話してゐたが、男が醫へ復ると車は又駈け去た。自分は其一群の方へ近附いて見て、今露子と話をしたのは前宵おてるが知らせてくれた所謂今日露子の地位を保たして居る伯爵だといふが解つた。前宵露子が閉鎖を喰はして入れまいとしたのは此男なんで、多分今逢つて前宵の辯疎をして居たのであらう。慾には今晩の所も旨く胡麻化して置て呉れゝば良いが。

是から後一日の日を奈何して暮したのか自分も知らない。歩行て煙草を吸て、談話をして――と何を言たか、誰に會たか夜の十時の鈴を聞くと悉くわすれて了つた。自分の記憶て居るのは、家へ歸ると三時間掛つて化粧をして、懷中計時と掛時計とを交る〳〵幾度となく見交した事。所が意地惡く時計が

双ながら丁と合てゐる。漸くの思で十時半の鈴が鳴るや否や、ヤレ出掛る時刻！

當時自分はプロヴァンス街に住居つてゐたので、白山町からプルバル街を通り路易街からマホン街へ抜けて安丹街へ來たのである。露子の家の窓を見ると燈火が點いてゐる。締めたりと鈴を鳴らして案内を乞ひ家の人に訊くと、後藤樣は平素十一時か十一時十五分でなければ見へません！やれ〳〵成るたけ徐々歩いて來た意だのに、まだ然かしらや、なるほど此家まで五分間で來てゐるわい。

所在がないから街を彼方此方へ逍遥いて見たが、此邊には商店はなく今時分になると街は寢入つた樣に寂しい。三十分計して露子は來て馬車から下りると何者をか求める如く四周を眴してゐたが馬車は命を傳へて歸して了つた。氣を替へ

へて今や鈴を曳うとする時、自分はつと側へ歩み寄つて。

『今晩は。』といひかけると彼は『ア、貴君ですか』應へたが其調子は如何に自惚て考へても彼が自分に會ふのを樂んでゐたとは聞取れない。

『今晩來ても可いつて貴女お約束して下すつたぢやありませんか。』

『然でしたね。つい忘れつちまつて。』

忘れ了つて！今少し言ひ樣もあらうものを忘れて了つたとは何たる挨拶だらう！終夜考へた事も夢と消えて了つた。今日一日懐いてゐた希望も皆無效！以前の自分なら如斯事言はれゝば直ぐにも憤つて、突と歸つて來たでもあらうが、餘程露子の遣口に馴れて來たので左のみは穢立もせず、お夏の啓けた戸を相携へて這入つた。

『おてるは來たかへ。』

『否見へませんよ。』

『直ぐにお入來なさいッて言つてお出で。ア夫より先に應接間の燈を消して。誰が來ても妾は歸ッてゐないッて、待つてるッても歸ッて來ん筈だからッて斷るんだよ。』

此場の光景、宛で先約のわつた處へ不意に飛込んで邪魔になりに來た樣、如何して可いのか何といつて可のかをも知らず、寢床の方へ去た露子を見送りつゝ、疑乎としてゐると、思掛けなく『此方へ光來い』と呼ふのであつた。

露子は帽を脱り天鵞絨の外套を脱いで寢臺の上に置き、夏の初めも焚いてある火の傍の肱掛椅子に身を倚せて鎖をまさぐりつゝ、

『時に珍らしい事はありますか。』

『何にも無しです。全躰私は今晩來る筈ぢやなかつたのでせう。』

『何故。』

『貴女お腹立の樣ですから。慥かに御迷惑なんでせう。』

『些と私健康が惡いのよ。今日終日鹽梅が惡くッてね。眠られなかつたの。アゝ頭が痛む！』

『私は歸りますから貴女お休になる方が可でせう。』

『歸らなくッたッて可わ。私眠たくなッたら卿がゐたッて着しないもの。』

此時戸外に案内の鈴。

『誰だらう今頃來るのは』とぢれッた相に身を動かして。少時すると又鳴る。

『誰も在ないのかしら。私が行かなけりやならんかね。』

やをら立上ッて『此處に待ッてるんですよ。』
と言捨てに驀て門の戸を啓る音がした。聞き耳を立てゝゐると
と來た人は食堂へ入れられたらしい。
『今晩は。御機嫌は如何ですか』と初めの一言で、ハ、ア伯爵だな。
『良くありません』と露子は素氣ない。
『私はお邪魔になりますか』
『かも知れません。』
『其處に素氣なく仕ないでも可ぢやありませんか。何かお氣に障る事でも致しましたか、ねえ露子樣。』
『否何にも。私加減が惡るいので寐るんですから歸ッて下さいよ。私が歸宅て來れば五分と絶たない間に屹度貴君の顏を見なけりやならんとは、よく〳〵因果ね！一體何用なの？』

婦になれッてんですか。夫なら口が酸くなるほど言ッたぢやありませんか。妾は可厭ですよ。眞個に可厭だから何處なと他をお當りなさい。今日限り堅くお斷り申します。貴君が何と言ッても妾は貴君となら何事をするのも可厭です。解りましたか。左樣なら。さあ夏が來たから門まで送ッてお貰ひなさい。』
と言ッた限り、愛想口一つ添へず、伯爵の呟くに耳も貸さず早々室に復りさま戸をぴしやり。
續いて這入ッて來たお夏を見て
『以來屹度覺えてゐて、那のおたんちんが來たら何時でも私は不在とか、お目に懸りませんとか明明と斷るんだよ。もうもう男に逢ふのはうんざりしちやッた。何の男も何の男も同一事を言ッて、代を拂ッて、其で差引勘定出來ちまつた事と思てゐるんだものゝならん先から此商賣の內幕が解つてゐりや誰

が好んで如何事をするもんか。皆吃度女中衆公でも爲ッ了うんだけれども、いや着物が欲しい、指環が差したい、馬車に乘りたい、遊んで見たいで到頭迷ひ込むのさ。何しろ聞いた儘を眞個に信て――斯商賣にだッて依樣眞個にする事は有んだものー何時となく心も臺無體も壞す、容色も滅茶〳〵にして了うのさ。他人受は如何かといや、狐だの狸だの、人喰婆の狼女と非人同樣に蔑視まれて、其實はお客に釣錢を取ッて往かれるに定ッてるんで。未はといやあ、吃度他も壞し我も壞して、まるで犬同然、果は何の道野たれ死さ！』

『御新造樣、々々一寸、貴女、もう可うございますわ。今晩貴女方が立つて被在るんですよ』とお夏がなだめる。

『ぢれッたいね、此着物は』と露子は堅くるしい着物を脱いで『袍を持て來ておくれ。そして何、おてるは？』

『尙來ませんの。來次第に直ぐ此方へ遣しますよ。』

『フン、おてるッたら本當に善く出來てるわ。勝手な時には、尻から跟け廻してゐて、私の用事といふともう日當に當らなきや決して爲やしない。私が他の歸るのを待つてる事は知て知り拔いてるんぢやないか。甚麼に私がぢれてゐるか先刻御承知でゐてさ。畜生、吃度、自分の事計り爲て私の事なんか忘れッ了ッてるんだよ。』

『先方で暇が入つたんでせうよ。』

『お酒を持て來とおくれ。可いから。』

『善い事ございませんわ。貴女御酒は』と夏はしみ〴〵顏を目成る。

『だから善いんだよ、ポンチと何か果實と雜でも附けて、何でも可いから即刻に。お腹が空てるんだから。』

此光景を觀て感じた自分の想を故と貴君へ申上げる必要はございますまい。勿論御想像が出來るでせうから。

『一緒に何か喰べませう』と露子は自分に私語いて『一寸部屋へ行ッて來ますからね。卿書でも讀んでゐらつしやい。』

と蠟燭を點け寢床の裏の戸を開いた。と見れば既や妾は隱れた。如恁生活は慣れなもんだね！と我が愛は追々哀憐と、混つて我識らず起上つて、室の中を彼方此方と歩行きつゝ、止め途もなく考へてゐる處へ丁度おてる婆樣這入ッて來て、

『ア貴君此方にゐらしッて……露子樣は何方？』

『ム、居間だ。』

『然ですか、では待つてませう。露子樣が貴君に惚れてらッしやるッて事貴君御存知？』

『否』

『貴君に有仰らなくッて？』

『聖とも』

『夫なら何故貴君此處へ來てゐらッしやるの？』

『訪問さ。』

『夜深更？』

『何故可けない？』

『御笑談もんですよ。』

『訪問したからもてなしてくれるのさ、勿論極無愛想に。』

『所が夫が今に良くなりますよ。』

『だらうか？』

『妾露子樣の喜ぶ事を今言はうと思つてるの。』

『夫は結構。時に露子樣が僕の事を言てたつて？』

『エ前宵よ――貴君がお友達とお歸んなすつてから。時に那

の方は何て方？たしか五性田様ぢやなくつて？』

『然』と自分は言つたが五性田が白狀した事と今おてるが彼の名さへ確かに知らぬのとを照し合せると自から微笑の溢るゝを禁ぜられなんだ。

『那の方は眞個に好い方ね。何して在らつしやるの？』

『年一萬圓の收入だ。』

『アラ然う！時に貴君のお話ね、露子様が全然貴君の事を訊いたの、何様人だとか、從來に何を爲たとか前に關係の在た婦人は何うなんて、それは貴君の年齢の人に就て聞きさうな事は悉皆聞くんだわ。で、私の知つてる丈悉皆話して而して終に貴君は好たらしい方よつて言つて置てよ。それ丈。』

『夫は難有う、前宵露子が用事があるつてお前に話してたのは何？』

『何でもないが、伯爵がうるさいから來ない樣につて夫限さ。が今日は私は眞個に露子樣に逢はなけりやならん事があるし夫れに又お使の返事を爲なけりやならんし。』

恰も露子が其居間から顯れた。黃色い房の下つた奈何にも可愛げな小さな帽子を被つた樣子はまことに美しく、洗足に繻子のスリッパを穿てゐるなど特に慄い付く程である。

『お前さん公爵に逢つて？』とおてるを見ると直ぐ。

『ヱ、逢つて。』

『何つて言つて？』

『あのう……下すつて。』

『幾何。』

『三千』

『お前さん持てゐて？』

『エ、』

『既う無いらしかつて？』

『イ、エ。』

『因業な奴！』

と言つた調子。到底記す事の能ぬものである。露子は五百圓札六枚受取つた。

『恰度間に合ふわ。』と露子は言つて『おてる様、お前様今お金要らなくッて？』

『ホラ、もう三日で十五日だらうぢやないか。だから二百圓も融通がして貰へりや全く私助かるんだわ。』

『明日取りにお寄越しよ。今兩替するッたて遲くッて仕様がないし。』

『忘れちや可厭よ。』

『大夫丈。此から一口呑むんだからお附合なね。』

『澤山、仙印が待てるんだから。』

『お前様依然那の人に？』

『私夢中さ！嬉し！明日また逢ふわ、左様なら、有難う』とおてる夫人は出て行つた。

露子は机の抽斗をグイと啓けて六枚の紙幣を投げるが如く其中へ。

『私床へ這入りたいんだから、卿、可い事？』と寢床の方に歩を運びつゝ優しき笑を漏らすので。

『可い段ぢやないです。貴女御病氣なんですから、何卒。』

彼は既寢床へ這入ッて『此方へ來てお坐んなさいよ、話があるんだから。』

おてるの言ッたのは眞個で、返事が來てから露子の機嫌は

慈くばかり良くなつた。彼は自分の手を把ッて、

『私今晩氣分が惡いんだから堪忍して頂戴よ。』

『貴女の事ならもう何時でも。』

『卿私に惚れて居て？』

『有頂天！』

『如怎氣違者でも？』

『甚麼な事にも順看おし。』

『眞個？』

『全く』と自分は囁き聲、

お夏が苺と葡萄酒、チキン杯を運んで來た。

『あのボンチは作らなかッたのですよ。屹度葡萄酒の方が貴女には良いんですものねえ卿然でせう。』

『然だ』自分は露子の最後の言葉に逆上せて了ッて、眼はまだ

飽かず彼を凝視めてゐたので、如怎言ッたのも殆んど器械的。

『良いよ。夫を皆其小さな卓に載けて、寢臺の傍へ持て來とおくれ。私等勝手に喰べるから。お前是で三晩寢ないんだから、睡むいに違ない。此處は是で可いから、既うお寢是で何にも要らないから』

『戸を閉て置きませうか。』

『まづ其麼もんだらうね。そして皆には正午迄誰が來ても入れちや可ないからッて、然言ッて置とおくれ。』

（十二）

曉がた五時、朝曙の光が窓掛を通して光明が室にさしこみかけると露子は自分を起して、

『堪忍して頂戴よ、追出んぢやないけれども仕方がないの。毎朝公爵が來て家の者が私は寢て居るからッて言ッても、起き

る迄大抵ちやんと待つてるんだもの。』

頭を抱着けると柔かい髪の毛の亂れて房々と頸に掛つて居るのが眼の先に波を打つ嫋かしさ。

『何日また逢へるね。』

『あの、爐の上に鍵があるからね、那で戸を啓けてお歸りなさい。今日中に手紙を上げてよ。其中に丁と書て置くわ指揮を。卿何でも私のいふ通り爲る筈なんだから。』

『夫は勿論。だが私が賴む事があつたら奈何？』

『何？』

『此鍵貰ひたい。』

『其は從來誰にも與た事のない物なんだから。』

『なら僕に丈ね。誓ふから、私の愛は他の人のとは全然異うんだもの。』

『では上げるわ。だが眞實をいふと、私次第で其は些も用に立たなくなつて了ふ。』

『何うして』

『戸の内側に掛金があるんだもの。』

『非道い。』

『他外して置かうよ。』

『夫ぢや少しは僕も好と見えるのね。』

『何うだか知らないが然らしく思はれるのさまあお歸りなさい、私寢むから。』

互に別れを惜んで扨て歸つた。

街路には未だ犬の子の影もない。廣々とした街は尙靜かに眠つて居るので、ものゝ二三時間もすれば人馬の響に充たされるのだが、今は寂として朝の空氣の鮮さ、身にそよ〳〵と足

も輕く、眠れる獨悉く我有の樣に思はれて、嬉しさ怡しさ言はうやうなく、實て那樣になつて見たいと羨んだ人や誰と、其名を胸に思ひ浮べても見たが、就を考へても依然自分に優る程幸福な人は無い。無い、慥に無い。

純潔な少女に惚れられる！始めて戀の不思議な味を彼女に敎へる！これ慥かに大きな幸福だが、併しながら、考へればこれなんぞは手輕なものさ。さだ擊たれた經驗の無い心を虜にする。何だ、備の無い城を乘取ると一ッも異つた事はあいのだ。敎育、家庭、義務、なるほど是等は嚴重な護衛だらう。けれど造化といふ豪い翁が其娘の可愛と思ふ男の口を籍て、純潔な燃える樣な愛の新らしい響を傳へさせる時に、尙よく欺かれずに姫君を衛るほど强い護衛兵は決してありはしない。

娘が善人なら、殊に譯もなく口說落される。よし男には負けぬしても戀其物には負けざるを得ない。根が疑ふといふ心がないのだから、でんで抵抗う力がない。さ、これだから此麼娘を手に入れる位の事、苟も二十五の齡を占めた男なら誰にだって出來損はない。僞と思へば世間を見るが可い。若い娘には甚麼に番兵が附てゐるか！宛で籠の鳥だ、加之も押込だ儘で花一枝入れても與らない。夫だもの、元來が禽、獸が曳けば飛びたくなる。花が咲けば唄ひたくなる。寺子屋といふ城壁も斯樣なッて來れば弱い者。母といふ錠前も脆いもの。宗敎の義務だヲて、年が年中といふ譯には往かぬ。此時、格子の間から優い優しい聲がして、おくがれてゐる人生の秘密を告せに來れば、之に耳を傾けるのは止むを得ぬ事ではあるまいか。意地惡く浮世を隱した不思議な幕を揚げてくれる其手を如何して可愛がらずに居られよう。

處が園ひ者に惚れられる！　これこそ實に非常な困難異大もない大勝利だ。心は肉體の爲に磨り滅され、精神は肉體の感覺の烈しさに燃し盡され淫逸遊蕩といふ奴が其情を鈍らして了ッて居る。男の使ふ言葉も、其意味も、全で耳に蛸で、人に捧げる戀は結局賣品商賣として戀をしたので、心からの戀ではないのだ。さらば、其算盤珠の護衛の手堅さ加減といッぱ、娘達を誘る母とか寺子屋に較べて正に十層倍である。高利貸が、千兩も二千兩も沒義道に掠奪ッて置きながら、饑に死かゝッた悶れな者を見て、多寡が一生に一度位ながら、利息も言はず請取書も取らず、十圓札の一枚も貸して與ると、夫で一切罪業忽ち消滅と心得て居るが如く、園者も時には身體休め、氣慰めとあッて、商賣づくではない戀をする事がある。是を命けて摘み喰。

神が園ひ者に眞の戀を許すと其戀は發端には赦免の樣に見えるが、終には大抵罰になる。其過去の凡て罪なる人が、俄かに、能ないと思つて居た、深い眞摯な、抑へ切れぬ戀を知り之を自白したとなると、さあ、其情夫はぐッと反身に成ッて、思ひ切り頭を壓へるに違ひあるまい。貴樣は金に惚れた時の戀も、今の戀も異りや爲ないなぞとやッ付る權利があると思ふのに違ひない。で如慾言はれた所で證據の立てやうがないのである。昔の話にといふもやかましいが、『狼だ、助けてくれ。』ッて村の者等を驅がせるのを戲にした兒供が、餘りに度々驅したものだから、呼んでも叫けんでも人が信じなくなつて、到頭ある日狼の爲に啖はれて了ッたといふ事がある。園ひ者が本氣になつて戀をする時は即ち是れで、餘り度々驅したものだから、誰も信とするものなく、終には悔ひつ恨みつして、戀其物の爲に

殺されて了うのである。彼等が往々身を殺して人の爲に盡し、或は世を退いて淸く尊く暮すといふ樣な立派な終のわるのは全く之が爲である。併しもし此純潔な戀の對手となる男が一切過去を忘れる丈に大量で、女から愛される通に身も心も投げ出して愛する場合には、此戀の爲に一切娑婆の煩惱は洗ひ去られて、双の心は互に緊く結び合される事となる。

結局我戀は如何なるのであつた。が自分の戀の强く深きにも拘らず、如何ならうとは思ひも初めぬ。已上の考も其時思ひ付たのではなく、今日萬事皆有ッて濟んだ後となつて見れば自然の結果として如何考も浮ぶのである。

夫は然として舊の話へ返ると、自分が家へ歸ッた時は宛で狂氣の樣に浮き立ッて居た。自分の想像で、我と露子の間に築き立て居た垣根が今は消えた、と思ふと——既う他は全く自分

の者だと思ふと——彼の心の中に自分の有てゐる地位は奈何ひふ者だ？と思ふと——何よりも彼の室の鍵は自分の衣兜の中に在ると思ふと而も其鍵を用ふ權利が自分に有るのだと思ふと——實に此世に活きて居るのが滿足だ。我ながら見上げた男である。神樣といふものも却々嬉しい物だ斯樣事にして下さるのだもの！

一日壯い男が街を通る時婦人に出會ッて、赤面しつゝ、恍惚と其顏を眺めくるッと回顧ッて、歸り去ッた。彼は此婦人を知らなんだのである。處が婦人には愉快もある、悲歎もある、戀も有ッた。但し此は、此男聊關係なし。婦人の心には、此男は世に無いと同樣である。だから、もし男が彼に話掛でも仕やうものなら、恰度露子が初めて自分に逢た時、嗤ッた樣に唯嗤ふ計りだッたらう。然るに幾週、幾月、幾年經ッて後、兩人各其運命に從て

異た途を踏んで來た上で忽然、偶然といふ論理の歸結で兩人がぶッつかる事となつた。夫計りか、女は男の情婦になつて、加之も男に戀れ込んで了ッた。何故だらう？　奈何した柏子だらう？　二人の二ッの生涯が今は一つになつて、永の年月互に思ひ合ッて居たかの如く思はれる。が實は今日此頃漸と知り初めた計であるものを、從來の事は凡て此二人の記憶から拭ひ去られて了ッたのである。唯不思議、奇體といふの外はない。

自分にして見ると、其晩より前の事は、奈何して生活して居たのか、更に記憶が無い。初めて彼と言ひ交した言葉を憶ひ出すと我生涯は、全然變て樂しい生涯と化ッて了ッた。是は露子が人を欺くに非常の妙を得て居るのか、然もなくば、初めて手を把り交す時忽と起つて又忽と消ゆる短氣な劇しい情愛を起したのか、二つ一つに相違ない。

考へれば考へる程、自分は益々强く信ずるので、何も露子が思ひもしない戀を自分に對して粧ふ理は少しもないのだ。全體女といふものは戀をするには二ッの入口があるので、就方から入つても屹度兩方へ通じるのである。女は往々肉體の感覺の爲に情夫を有つと、其意はないながら、何時となく精神の戀の秘密を知る樣になつて、其から已後は心の中でのみ娛み活きる事になるものだ。之と反對に、男女の純潔な愛情を結ばうばかりで結婚した娘が、忽ち精神に映る最も純潔な印象から、必ず生ずる强い結果――即ち肉體の愛といふものを知る樣になる。

考へて居る中に何時か寢て了つて、露子の手紙に漸と眼が覺めた。其文言。

一、今晩ヴオードヴイールへ、中幕三番目においでなさい。

で、　つ、

手紙は丁と抽斗へ入れた。是は眞箇に在るのか無いのかが時々心掛りになつてならないから、其時は直ぐ手許に見られるやうにといふ考なので、

昼の間逢ひに來いとは言つて來てないけれども顔が見たくッて堪へられず、到頭暮れるを待たず極樂街へ行つて、昨日の通り二度茲を通る露子の姿を餘所ながら見て少しは虫を落付けた。

午後七時、早やヴォードヴィールへ出掛けた。如德早く劇場へ行たのは生れてから初めてゐる。左右する中桝は密窓がつたが、一ッ丈殘つてゐる。ゐはずもがな、自分は眼を器械の樣に、始終此桝に注ひで居ると、中幕三番目の初めに戸が啓いて、現れたは露子。直ぐに前へ來て、ずッと桟敷を眴したが自分を見ると目色で夫と謝を言る。

此夜露子は類ふものもなく美くしい。我に見せんとての扮裝か？ 美しく見えれば見える程、自分は益々嬉しがる、と思ふまでに自分を愛して居るのであらうか、其は自分に解らぬけれども、もし其意だつたとすれば慥かに成功だ。何故と有仰れ、彼が現れると衆の眼が均しく彼の身に集つた。舞臺に居た俳優迄が、如德も、觀客を動かした物は何？ と結局露子を見た位で、此時の自分の得意！ 茲に御座る此乃公樣が、此婦人の居室の鍵を持て居るんだぞ。ものゝ三時間か四時間もすると、此婦人は俺の有になるんだ。何と、凄からう！ といふ意氣組。

人は女俳優とか園ひ者に惚れて、身代を壞すのを非難するが、自分が考へると、世間の男が、もッと〳〵白痴を盡さないのが不思議でならぬ。當然なら世間でやる十倍も二十倍もの事にならねばならんのである。婦人が毎日男に向て諂辭をいふ

其奴が積り積りて、元來男の心にある戀――別の名が無いから斯ういふて置くが――其を愈愛い動かされないものに爲て了う、と自分は考へるので、是位の事の解る丈の經驗は誰しも壯い時一度は必然爲つたに違ひない。

おてるが次に桝へ這入つた、すると續いて男が一人、それはG伯爵で直ぐ背後の桝に坐つた。と見るが否や、自分は襟元から水を浴びたやう。

此人が茲に顯れたので、自分は甚麼想がしたのか、露子は慥かに悟つたに違ひない。再び自分に向て意味の有る微笑を洩らし、くるりと伯に背を向けて、左も演劇に身を入れて居る風を爲て見せた。中幕第三で露子は廻つて二言三言いふと伯が桝を出た。すると直ぐ自分を慰くので、得たり賢こし飛び込む

と手を差出しながら、

『今晩は、まあお坐りなさいな。』

『だが誰かの席を窃む譯ですな。G伯爵は歸つて見えるので

せう。』

『エ、、果物を買ひにやつたんだから暫時は話して居ても可の。おてる樣は秘密にして置くから。』

『然だとも大丈夫よ。何にも喋りやしないわ。』

『卿今晩奈何して？』と露子は起て桝の後へ來て、自分の削瘦に接吻しながら如何言つたので。

『餘り加減が良くない。』

『床へ這入つてお休み。』とはぐらかす、其調子の旨い事、優しい才の走つた顏容に極めて適當しいので、

『何處で。』

『お宅でさ。』

『家では能う寝ない事は貴女も知つてるんぢやないか。』
『夫なら私の枡に男が一人居たからつて態々茲まで其座すねた顔を見せに來なくつても可わ。』
『人が居たからつていふのぢやないのです。』
『否然よ。解るわ。其は卿が悪いのよ。もう其座事言ひこなし劇場がはねたらおてる様と一緒に歸つて、私が往くまで待てらつしやい、解つて？』
『ア、』
『奈何して否やのいひ様があらう？』
『依然私可愛くつて？』
『能く其座事が尋ねられますね。』
『私の事を思つて？』
『日がな一日。』

『私卿が眞箇に好きになりやしないかと思て心配して居る事卿知つてゝ？おてる様に聞いて御覽。』
『眞箇、まあ驚いちまうの。』とおてるは口を挿んだ。
『さあ卿の枡へお歸り。伯は既う歸つて來るわ。卿が茲に居るのを見付て餘り益になる事もないから。』
『何故？』
『だつて卿彼の人を見るのが嫌なんでせう。』
『否だが沒し貴女が前以て手紙で今晩茲へ來たいと言ッてくれさへすりや、僕だッて伯の様にちやんと枡を買ッて置くものを。』
『お生憎様、彼の人は私が頼みもしないのに買ッて置たんですよ。而して一緒に行かうッて私に頼んだんですよ。私が斷れないッて事は卿も知ッてるでせう。蔭ながらにでも卿が私の

顔の見られる樣に。ホヽ、そして實は私も卿の顔が見たかッたもんだから、今晩居る所を知らした丈が漸だわ。人が折角骨を折ッて爲て居るのに、卿の言ふ事ッたら其麼だもの。是から私も其意さ。』

『否僕が惡かッた。堪忍ね、堪忍。』

『可い事よ。さあ温順しく卿の處へお歸り。そしてね、もう妬きッこなしよ。』

彼は再自分に接吻した。自分は桝を出たが、危い處、廊下で丁度伯の歸て來るのに出會した。

G伯爵が露子の桝に居る。世の中に是程自然な事はないのである。伯と露子とは元よりの情交だ。其伯が桝を買ッて露子を劇場へ伴れて來る。何でもないさ。當然とも。我不肖なりと雖も苟も露子の情夫になる已上は、彼の遣り口に慣れなくちゃ

ならない。何の臭とは思ッたものゝ、其からは大層氣分が面白くないでおてると露子と伯とが戸口に待たせて有た馬車に乘ッて走せ去るのを見てから、悄々と歸ッて來た。

歸ッて來たといふも東の間十五分間すると既自分もおてるの家に往ッて居た。恰も彼も歸ッた所である。

（十三）

『貴君疾かつたのね、大方私達と同じよ。』

『アヽ』と自分は殆ど器械的に應えて『露子は。』

『お家。』

『孤獨？』

『G伯爵と。』

『自分は室の中を彼方此方と歩行いた。

『何如かして？』

『だつてG伯が歸る迄、で待て居るが面白いか面白くないか考へて御覽。』

『夫は貴君が無理といふものさ。眞逆露子樣が伯を追出す譯に行かないぢやありませんか。長年伯爵と一緒に居たんでせう。夫に平常でも金錢を貰つてゐるし今でも貰つてゐるのよ。露子樣は年に五萬圓から貰うんでせう。夫で借金が山ほどある。言へば幾何でも下さるんだけれども、要る丈全額强求る事は能う爲ないんですよ。だつて一年五萬圓からのお得意だもの。喧嘩して了や事でさあね。露子樣大層貴君に惚れて居るのだけども此情交は餘り深入しちや可けませんよ。夫では御互の金にならん。ね貴君、一年三千か四千の收入で、那麼贅澤な婦人の費用を一三味負背つ了つて奈何なるもんですか。何うして、何うして馬車丈にも足りやしない。露子樣は露子樣で、あの

儘で情婦にして置く事さ。高々花を買つてやるとか、果物とか、劇場の桝位にして置て、決して其外の事を思つちや可けませんよ。飛でもない。苦助を起すなんて。貴君の關係つてるのは誰だと思ひます。露子樣は佛樣ぢやありませんわ。露子樣は貴君が好き。貴君は露子樣が好き。夫れ丈、夫れ丈で既う可んでさあ。眞箇に貴君はおばこだ事ねえ。巴里一等の可愛い女を情婦にして居るんですよ。太夫買はふが花魁買ふが那麼風して來やわしない。ね體中金剛石づくめ、夫で出すまいと思やあ二分も要らない、是れ程結構な事で不足をいふとは貴君も餘まりですよ。』

『夫は道理だ。だが何うも仕方が無いんだね、あの男が露子の情夫かと思ふともう堪らないんだもの。』

『第一』とおてる夫人は强かに『那の人は今日既う露子樣と關

係はないんですよ。なるほど那の人は露子様には必要の人といふ丈で其他はないの。露子様は彼の人を容れない様にッて二日も館出を喰はしたぢやありませんか。夫で今朝見えたもんだから、詮方なしに劇場行を承知して一緒に行たんですわ。歸途に送て來て、眞の些と入ッた丈で、決して泊りはしない、貴君が茲に待つてるんだもの。私から見りや皆當然さ。貴君も可笑しいぢやありませんか、公爵の事は何にも言はないで居てさ。』

『だつて他は、老人だもの。僕は露子が公爵と關係のない事は確かに知つて居る。情夫も一人は可いさ。二人は惡いさうなると宛で商賣の樣になる。之を默て見て居る男は、熟く下等社會にあるが、知つて知らん態をするのを商賣にして、之で儲けるのと同一例になつて了ふ。』

『まあ貴君は何だつて北廣昔し臭い理屈を擔ぎ出すんだらう！　屈指の金滿家で、交際社會にも名の通つた、歴とした大家の旦那樣が、私が今貴君に爲さいといふ事なら、其場で恥ともせず、悔みもせず、何時でも願いたいといふのを私は屢々見ましたよ。毎日の樣にありまさわね。眞の圍ひ者で、三人や四人の旦那が無つた日にや甚麼して那の粉裝がして往けます？　到底一人の財産では奈何に大きくつたつて、露子樣の樣な婦人の費用が拂へるもんですか。一年二十萬圓の收入、夫れは佛蘭西では莫大あるもんでさあね。たが此一年二十萬圓が到底足りつこあいんですよ。可うごぜんすか。此丈の收入のある人なら、邸は馬鹿に大きいわ、馬は飼う、召使は居る、馬車か在る、鐵砲打はする、友達は來る、度々婚禮する、兒供が澤山ある、競走する、博奕は賭つ、旅行をする、何一つ爲ない事なしでせう。此丈の人に

なると、否が應でも是丈の事はせねばならん事になつて居るんです。もし爲ないといふと、やゝ身代を壞したの何のと騒れ噂が立たずに居ない位になつてるんでせう。此丈費つて御覽なさい。一年に二十萬位の收入があつた所で、婦人に與れる金といへば二萬位しか在りやしませんわ。夫たけでも隨分大した金、夫れでまあ他の情夫が非足らず丈を持つてッた樣な具合になるんでさあ。露子樣にして見りや都會が良いんですね。不思議な樣で生命といふ娘を沒してしまつた老爺樣に逢着つたのね。一年千萬圓の收入があつて、厄介といへば一人も無し、姪とか甥とかは二三人在るんですが、其がまた皆金滿家、露子樣が下さいッていへば、何もしないで強求る丈は諾々つて下さるのだが露子樣は一年三萬圓より上は頼まない。奈何に金持で、又露子樣を可愛がつて在らしつても其上頼んだ處で

もう下さりやしないに極つてるんです。

『巴里で一年一萬圓內外の收入のある若い人達、漸やつと交際をして行ける丈の人ならば、乾度露子樣の樣な女の情夫になつても、自分が與る丈ちや到底部屋料と下女の給金にも足りないッて事は百も承知なんで、夫で居て、其麼事は言はず、知らん顏をして置て、他きりやぶいと退いて了う丈の話、もし如德處で妙う痞我慢でも張つて、入用萬端乃公が引受るあんどゝやらかさうもんなら、暗く間に身代限り、といの結局は五萬か十萬の借金を遺して亞弗利加へ高飛の、追劍か何かに殺されッちまうッてなみじめなもんでさ。如斯して婦人が悅でくれると思へば飛んでもない間違、先方ちや男の爲に費澤も出來ず、情交になつて居る間却々情立てゝ犧牲になつた、那の間お金の儲け損で、加之に自腹を切つたッて觸れて廻るんですよ。

貴君は默然なさるでせうけれども夫が眞實なの、貴君は良い方さ、全たく、私眞箇に好きさだからくどく言ふんです。私はもう如何いふ婦人とは二十年も一緒に暮して來たんですから、甚麼物だか良く知つてる、那の娘の浮氣を眞面目になつて受けない樣に。』

『夫れから』とおてるは語を繼いで『今茲で貴君の事が伯爵なり公爵なりに知れて、さあ有馬と切れるか乃公を見切るかと切出された時に『はいどうあつても有馬樣は止されませんから』つて、先方を袖にする迄の情が、よし露子樣にあるとしても、露子樣が貴君の爲にする犧牲は夫は眞大なもんですよ。可うございますか、此に對して貴君は奈何丈の事をおさいます？若し其中貴君が他きた曉には、奈何して今の犧牲に報ひます？何にも有りやしますまい。男一人に附切りの、他の人は振り切

つ了つた後ですもの、將來身の立ち行く樣な手係りつてものは何にもなくなつ了つてるんでせう。其處へ持つて來て花盛りは貴君に見られて了つて、そろ〳〵もう姥櫻、そして情夫には捨てられの、世間からは忘れられ！、

『貴君が普通の人ぢら露子樣の既往の事を、有る事無い事數へ立てゝ、是迄の情夫の爲た御手本通りと因果を含めて、將來のみじめな生活は、覺悟承知の上で突放すでせうし、貴君が正直で、何うでも連れ添ふて行かねばならんものとお思ひなされば、それこそは貴君の大迷惑、圍ひ物も壯い間は人も許してくれますが、三十あとに見てからは人も默つては置きやしません。萬事に就けて邪魔になつて來ます。男の二度目の戀、其家庭も造る事が出來ず、男の最後の戀、其出世の望の妨にもなりますわ。だから悪い事はひませんから、物は何でも買被らん事。

何如事しても圍い物に借錢負ふ樣な目に逢はん樣に、ねえ。』

成程理屈の筋は善く徹つて居るおてるが是迄明瞭した理屈が言へやうと思はれなかつた位。誠に道理といふの外、何と答へる辭も知らず、手を把つて深く謝辭を述べた。

『ザア〜』と彼は極氣輕になつて、『如德高慢な事は止して、笑つて了ひませう。浮世は面白いもんでさあ、ねえ貴君見る眼の眼鏡の色に因るんですよ。然々、お心易い交だから五姓田樣に尋ねて御覽、那の方は私か解る程に戀の所譯が解るらしいわ。貴君が今考へなくちやならないつて事は、可うございますか、馬鹿でなければ、眼の前に美人が箒を立てゝ客の歸つて行くのを待兼ねて、貴君の事計り考へて、夜一夜貴君の爲に明けて、而して貴君に惚れて居る、と是丈考へりや可いんです。ザ、一緒に窓の所へ行て、伯の歸るのを見て居ませう。もうやがて歸る

時分だから。』

窓を明けて椽側の處に立併び、彼が道行く人を見る間自分は考に沈んで居た。彼の言葉は解らずに耳の傍でがん〜いふ計りたが奈何思つて見ても彼の考が間違つて居るとも思はれん。併し、直ぐその跡から打消したくなる。潔く强き我が戀は務めて此理屈に從はうとするが、夫が甚だ難かしいで時々に出る溜息、其度毎夫人は此方を向て肩を聳かす。宛ら醫者が匙を投げる時のやう。

『感情の急劇な事を思ふと壽命の短いつて事がつく〜知れるね』と自分は自ら語るので、『自分が露子と知り合つたのは漸と今日で二日だ。情婦にしたのも眞の昨日の事だ。夫れでも自分は無我夢中さ。一寸G伯が來た丈が酷く鬱ぐ種になる位に、自分の思想も、心も命も其方に計り引付られて了つてゐ

る。』

漸との事！伯は出て來て馬車に乘つて何處か行て了つた、おてるは待ち兼ねたと計り窓を鎖る。丁度此時露子が自分等を呼ぶ聲。

『即刻お光來よ。今御馳走の準備してゐるの、一口呑むんだから。』

自分が這入ると露子は走せ寄つて、緊と首にしがみ付き、力の限り接吻した。

『まだすねてるの？』

『否、既う濟んだの。』とおてるが遮つて『今お說法したのさ。それで坊樣爾來お温順にするつて指切おすつたの。』

『さう、良い事ね。』

我にもわらず自分は寐床の方を皆と見ると、床は伸べてある。殊に露子の着物は白の寐着……我等は卓に就いた。

愛嬌と優しさと粧らぬ態度と露子には皆具つて居る。何うして此上餘計な注文をする事が能よう？他の人なら今の自分の位地を甚麼に難有がるか知れやしない。だからヴアジルの牧羊者の樣に神樣――美くしい女神――が下さる者丈で滿足して悅んで居るが當然だ。其事々々、屢々自ら我を說得して、必ずおてるの言つた事を行つて試よう。露子やおてるの樣に悅んで、笑つて、巫山戲やう。とは試たものゝ、二人には極自然な行が、自分に取つては一勞苦なんだ。自分が努めて笑ふのは、悅には緣遠く、寧ろ涙に近い方だ。

到頭酒も濟んで自分と露子は差向ひ。彼は常の如く爐の前に坐つたが物思はしく火を見入て居る。何を考事して居るのか更に解らぬけれども、自分は彼の爲なら甚麼苦勞をでも悅

んで爲やうと思つて居るので、愛と恐怖を混へつゝ彼を眺めてゐると、露子はやがて

『私何を考へてるか知ッてゝ？』

『否』

『一寸思ひ付いた計畫があるの。』

『其麼事？』

『未だ言はれないんだわ。だが其をすると奈何なるッて事丈は言つて上げても可いの。其をするとね。茲一月經つと私の躰は身體になつて、全然借金も無くなり、此の夏は兩人で田舍へ往つて暮せるやうになるの。』

『如何してするッて事は言はれないの？』

『アゝ、唯貴君はね、私が卿を可愛がる通りに私を可愛がッて居れば可いの。然すれば丁と出來るんだわ。』

『で、其日論見は貴女一人で作つたの？』

『アゝ』

『で、單獨で夫を爲る意？』

『私單獨で骨を折るの。』と今も尙忘れられぬ嬉しさうな媚めかしい笑を湛へて。

『だがね、出來たら兩人して得をするのよ。』

得をするといふ語には自分はハッと赧顏した。B卿の金を捲き上げてデスグリーと二人で費つたマノンレスコーの事を思ひ出さずには居られない。

我は席を起つて嚴かに、

『露子、僕の目論見で僕が爲る事の利益丈を兩人で分ける。然しなけりや僕は肯かんよ。』

『とは何の事？』

『夫は此樣いふ事だ。お前の目論見には必然G樣が關係して居るだらうと思ふ。夫れなら僕は關係もしない代に、出來た處でお蔭にもあやかり度ない。』

『まあ卿もお坊樣ね。私は卿が私に惚れてる事と計り思つて居たんだわ。大きな間違ね。夫なら夫で可い事よ。』

言さま彼は起つてピアノに向ひ、アンピタション、アラ、ヴアルズの曲を奏し初めたが、例の手の込んだ所へ來るとぴつたり止つた。習慣の所爲か或は自分が初めて會つた夜の事を回想させる爲か、夫は解らん。が兎もあれ、其調子に其夜の事を想起して、堪へず彼に近きつ、双の手に彼の頭を抱付けて思ひ切り接吻せずには居られなんだ。

『ね堪忍しておくれでないか。』

『堪忍してるぢやありませんか。』と彼は優しく『だが御覽なさい。今晩で漸と二日目よ、それに私は卿に許して上げなくちやならないんだもの、是でも卿何にでも諾々ッて私のいふ通になるッていふの？』

『夫なら如何すれば可いの？僕は你りお前を愛し過ぎるものだから、些とした事でも何だか氣が揉めるんで。今言ッてくれた事は、實に嬉しくッて氣が狂ふ位だけども、如何して其を爲るのか解らんものだから、其が大層氣に掛るんだ。』

『夫おやね、言ひませうよ、』と自分の手を把ッて、拒むにも拒めぬ愛くるしい笑を浮べつ、『卿私可愛いんでせう。ぢやなくッて？田舍へ往て私と唯た二人で二月か三月遊ぶのは良いでせう。私もね、二人限りで誰も居ない所に暮すのは眞箇に嬉しいの。嬉しい計ぢやないわ、私體の健康が惡いから是非然爲なくちやならないのだけども左樣長い間不在にするんだから、何

も彼も整然と片付けて置かなくちやならんでせう。所が私の様な婦人の事ッてッたら。それは滅茶々々なんだから。それで、之を良くする工夫をしたの。お金の方も良し、私が卿に惚れて居るのも良くなる様に。アラ、眞箇よ、卿にさ、笑ッちや可厭よ、眞箇に馬鹿ね、私や卿に惚れちやッてさ、夫れだのに卿は殿様風を吹かして太平樂を吐くんだもの、お坊様だわ。度胆子もないお坊様さ。だから唯卿は私に惚られてるつて事を記憶て居て、其外何にも考へないが可いのよ。可くつて？』

『お前の云ふ事は何でも肯く。御承知の通り。』

『夫だとね、一月經たない中に兩人で田舍へ往て、川の邊を散歩したり、牛乳を飲んだりするの。後藤露子が卿に如何事言ふのは可笑しかあなくて？可いわ、何でもないわ。巴里で暮してると大變面白い様だけれども、飽きて來ると、餓かに靜かな生活をして子供の時分に復て見たくなるの。然でせう、其處に長たつて誰にも子供の時分はあつたんですもの。昔譚をするからつて卿驚かなくても可いわ。眞逆私も士族の娘で、茶の湯、生花、薙刀の稽古も致しましたなんていやしないから。私は水呑百姓の娘で、六年前には自分の名前も能う書かなんだの。卿腹は立たんでせう。私が一緒に此樂を爲ようつて頼むのは卿が初めて。何様いふ譯だらう。私はね、卿が私を可愛がるのは私の爲に可愛がるんで、卿の爲に可愛がるんぢやないやうに思はれるからだらうと思ふの。他の人は皆反對だつたけれども。

『私は熟く田舍へ往つたけれども此度の様に往きたいと思た事は無わ。だから、卿と一緒に行き度んだから。邪慳にしちや可厭よ。他わ永生を爲ないんだから。他が始めて自分に頼んだ事。加之も如何譯のない事を爲てやらなかつたら、必然其中悔

ひ事があるだらう」と其樣思つて、屹度行くんですよ。』

斯度辭に答へ樣があらうか、殊に初めて逢つた晩の樂たしさを想出し、今また二晩目の其を想つてゐる其最中に！

是から一時間して自分は双の手に露子を抱いて居た。此時もし露子が我に叮いて、假令罪を犯せと言つたにしても、我は決して之に背く事は能爲なんだに違ない。

朝六時彼の家を去る時、飽かぬ心を一言に籠めて『今晩まで！』

彼は今迄になく懷かしげに接吻した、但し無言。

其日手紙を受取つた。

『お坊樣、私大變鹽梅が惡いの、醫者樣が靜にして居ろていふので、今晩早く寢るから、あなたには逢はないわ。其代りあす十二時に光來い。私あなた大すき。』

見ると、思つた畜生、騙しやがる！

額から冷汗がだら〳〵と垂れる。疑位で切れて了ふ程の淺い戀では既ないのだ。如怎事位露子には始終の事と思つて居なけりやならない、殊に自分が他の情婦を有つて居る頃には度々有つて珍らしくもない事、唯氣にも留めずに放つて置いた計り。露子に限つて如怎我が難むとは、抑彼が自分の生涯の上に有つてゐる力は一體何だらう？

後また考が起つた。自分は、鍵を有つて居るんだ。之を持て平素の樣に會ひに行けば可い。直に眞實の事が知れて了ふ。もし男が居たら……搏ふ事ない。しやッ面打ん擲て呉れる。

直ぐ極樂街へ出掛けた。待つ事四時間、露子は來ない。日は徒らに暮れた。憑りすまに彼が平素行く劇場といふ劇場悉く這入ッて見た。が何處にも居ない。

十一時、安丹街へ往つた。露子の窓には燈が點いて居ない。はず夫でもぐいと鈴を抑して案内を乞ふと、家の主人は誰を尋ねてと訊くので、

『後藤露子様』といふと、

『お見えになりません』と吐かす。

『上つて待つて居やう。』

『何誰も被在ません。』

鍵ッてものを持ッてるんだもの、這入る事の能るのは言ふ迄もない。併し詰らん悪口を利かれるのも感心しないからと温順しく帰つた。否家へ帰つたのではなく、安丹街を去るに忍びず、眼は露子の家に注いだまゝ、此處辨慶の立往生。何うも自分の考でも尚其處に發見されるべき或ものが殘ッて居る。動くとも自分の疑が事實となりさうに思はれるのであッた。

夜深更見記憶のある馬車が其九番地の前で駐ッた。G伯が下りて馬車を帰し、而して家へ這入ッた。少時の間自分は奴も御同様追つ返されて悄々と出て參りますやうと祈つて居たが、あはれ、朝の四時といふに、自分は尚空しく彼を待つて其處に停んで居たのである。

嗚自分が墓堀以來の三週間の苦しみは抑奈何ばかりでせう。御承知の通ですが、考へて見ると此の一晩の苦に比べりや那位は何でもないです。

（十四）

男として一度も女に馬鹿にされた事のないものは世の中にありはしない。尠くとも一度位、自分が今日苦しむ味を知らぬ男はないのである。けれども自分は如慾目に逢ふのは我だ獨りの様に思はれて、家へ帰ると兒供の様に泣き出した。

既う直に切れて了はう畜生、早く夜が明けないかなあ、直に立つて親父と妹の許へ行かう、女には振られたが、親父と妹の愛だけは確實だ、是計は騙される事なしだから是非然しよう、已今にもとは思つたが、手紙一本遣らないで捨てゝ了ふのは眞實未練が無いのでなくば能ぬ仕事で、有繋に一言露子に知らさず行つて了ふのは、ちと行兼ねたものだから、頭腦の中で書いては直し、直しては綴り、約二十通も手紙を作つて見た、對手は露子とはいへ依然賣女なのだから、其意でなければならん、夫を自分は除り詩的に爲たから可ない、露子は自分を宛で子供待遇にしてるんだ、失敬な、極めて幼稚な手段で、自分を騙して居かんだ、と威張つて見る氣が先に立つて、自分が前宵から腹を立てたのゝれたのゝといふ事は知らさずに、立派に棄てやうと決心し、忿怒と哀傷の涙に兩眼を潤はしつゝ、一生

愚命綺麗に書き上げた文句、

『昨日之御病氣左のみ重體ならざりし事と存候、昨夜十一時御訪ね申上候得共、御越し無之との事に有之、然るに程なく御越相成候G氏は午前四時までも御歸りにならず、誠に仕合な方と存候、

『束の間なりとも其許をうるさがらせ候段御ゆるし被下度われら事、其許より得し樂しさ、其折の事ども、いつまでも〳〵相忘れ申まじく候、

『本日御伺可申筈なりし處、是より父の許へ立歸る考に候、

『いざ御別れ可申、われら事、其許を愛するに足る程の富有にもあらず、さりとて又、其許御注文通り、其許を愛する迄に貧しくあはれなるにも無之、されば其許にありてはどうでもよい名、われらにしては最早望まれぬ樂を、御互に今日かぎり相忘

れ可申候。

『御預り致しながら一度も役立て申さゝりし健、昨日の樣な御病氣度々起り候ては定めし御入用にも可有之と存じ、正に御返し申上候。』

御解りでせう、終尾の方に一寸ぎッた文句をびり〳〵とやらないぢや、何うにも氣が濟まなんだので。是でも何の位自分が惚れて居たかゝ解るです。

繰り返し〳〵十度も讀で見た。フム、此なら大分痛からう。よし〳〵此にして置かう。と漸と決着したのが朝の八時。恰も權助が這入ッて來たので、すぐ持て行くやうに吩咐ると、

『お返事を戴いて參りますか。』

『お返事はッて尋ねたら、聞いて來ませんッて待つて居れ。』

と口にはいふものゝ返事は必ずと浮立ッて居たので。

考へて見りや人間といふ奴は哀れな者。權助の歸らぬ間、自分はもう待遠で〳〵仕方がない。或時は露子が奈何ばかり我を慕ッて居るかを思ひ、又自分が何等の權利で那麼皮肉な手紙を書たかを考へて見る。屹度露子の返答には、G伯が自分に取て代つたのでなくて、自分が却てG伯に取て代つたのだといつて來るに違ゐない。此論法で往けば婦人が澤山の情夫を有つに聊支障ない事になる。ともすれば又露子の約束を憶出して、あの手紙は餘り柔か過ぎたとも思ふ。あの文句では自分の戀を笑ふ樣な婦人を責める丈の力はなかッた、惜い事に。と恨むかとすると、又一層の事手紙を遣らなければ良かつた。自分で往ッて眼の前に、奴がはろ〳〵泣くのを見て笑つて遣るのであッたものを。など思ッた揚句、一體何と言つて返事をして來るだらう？と思ふのであッた。勿論如恁なれば假令何

と言つて來ても、夫で許すどこして了ッてあつたのに違ひない

權助は歸ッて來た『どうだッた』と尋ねると、

『未だ御目覺になりませんので、お目覺次第お渡し申しまして、御返事がありますやうなら、手前の方から御屆け申しますと云ふ事で。』

『まだ眠て居る！』

凡そ二十度も手紙を取返しに遣るべく起ちかけたが自ら『イヤもう露子の手に渡つたろう。もし取返しにやると奈何にも悔んで居る樣で弱身になる。』と抑へて了ッた。

露子から返事が來るらしく思はれる時刻の近づくほど、金手紙を遣たのが悔まれてならぬ。時計は十時を搏つた。十一時、十二時、我は夜來何事も無つた樣に、約束通り露子を訪ねようと出掛つた。が、待て、手紙を遣つたぢやないか、噫進退……

人が待つ時には熟く思ふやつだが、一寸出て來る。すると不在の間に來るだらう。かなんか考へて、一寸畳仮と家を飛出した。

平素の樣にプールバールの角のフォーイ亭へは往かずにバレロアイヤルへ往た。といふのは、實に安丹街が通りたかつからで。向ふの方に婦人の姿を見る毎に、や、お夏が返事を持つて來る。と思つたが皆虚郵便夫一人逢はずに通つて了つて、到頭料理屋。何か給仕が持て來た。否むしろ給仕の勝手のものを持て來たが、孰にも手を着けず終ひ然とは自分に氣が付かんが、眼は始終時計に注がれて居たので。幾程もなく其家を出て、もうたしかに返事が來て居る時分と、入口で問けど何にも受取らないといふ。權助が受取つて居るだろうと、這入つて見ると、自分が出てから來た人なしとの事。

返事を寄す位なら疾くに寄した筈。

他は餘り酷過ぎた。否、でんで何にも言はん方が良かつたのだ。さうすれば露子の方で異しく思ふ。自分が約束通り行かないから何故來ないつて訊ねて寄す。其處だ。其處まで釣て置いて、初めて手紙を渡すんだッたわい。如恁なれば可厭でも辯疏をしなくちやならん。要するに辯疏さへして貰へば夫で可いのだ。其麼辯疏でも言つて寄しさへすれば、それ信じたに違いない。何でも可いから如恁目に逢はされるよりは、會へる事にさへなれば其が勿論優だ。

露子が自分に來て口づからいふのだろうと終には思ひ出したが、一時間、一時間、と時刻は移るばかり、終に來ない。して見ると慥かに彼は他の婦人と違つてゐる。普通の婦人なら那麼手紙を受取つて默止つて居る譯には行かない筈。

五時家を出て、若し逢つたら素知らん顔をして居てやる。思切つて、未練なしといふ容子をしてやる。と極樂街へ急ぐ途に、ロアイヤル街の曲り角で、丁度露子の馬車を見た。餘り不意打だつたので、忽ち自分は眞蒼になつた。彼は自分の心事を看破たか知ら。我は眞迦に逆上せて居たので、唯瞥と馬車を見たつ限。

もう極樂街の方へ行く要もない。さらば劇場へ往けば見る機があろうと看板を見れば、恰度バレーロアイヤールが今晩蓋開。必然其へ往くに違ひない。どれ、といふので七時に丁と劇場へ行つた。棧敷は次々に塞つたが、露子は終に來ない。出て彼が常に行くと思ふ劇場は悉く行て見たが、就れにも居ない。

手紙が餘り酷過ぎて心配したもんだから、劇場へ來る氣も無くなつたのか。又は出逢つちや辯疏を爲なければならんか

らそれを避る積りだらふと自惚で一杯になつた最中、ゆくりなく五姓田に出會した。

『ヤ何處へ往つたの。』

『パレーロアイヤール。』

『僕はオペラに居たが那處で君に逢ふだらうと思つて待てたんだよ。』

『何故。』

『何故つて露子樣が來て居たもの。』

『ア、那處に居たか。』

『ウム。』

『單獨で？』

『否他の婦人と。』

『夫れ丈？』

『G伯爵が一寸來たが露子樣は公爵と一緒に歸つたよ。僕は今にも君が來るだらうと待ち通したのさ。恰度僕の隣席に空いた棧敷が在て、誰も來ないから、確かに君が取つて置いたんだと思つてたんだ。』

『だつて何故僕が露子樣の居る所へ往かなくちやならないんだい。』

『露子樣の情夫だもの、お願申しますせ！』

『誰に聞いた、其麼事。』

『昨日おてるに逢て全部聞たよ。まあお目出度存じます。イヤ眞實に露子樣は美しくつて良い婦人よ、誰にだつて出來るといふ婦人ぢやないんだもの。切れない樣にしたまへ。結構だね、君は。』

五姓田のいふ事は簡單あがら、奈何にも自分の疑つたのは

無理だつた事が思はれる。前宵五姓田に逢つて、彼が今の通りの話をしてくれて居たから、我は決して最前の樣な手紙は書かなかつたらうものを。

寧そおてるの家へ往て露子の家へ行て貰ひ、自分に逢つてくれるやうに頼んでやらう。と歩を其方へ向け掛けたが、待て、必然露子は返報に、お目に掛る事は出來ません、なぞと濟まし返るだらう。と又安丹街を通つて家へ歸つた。歸ると再び門口で、手紙は來ないかと聞て見たが何にも來ぬ。然だ、僕が又何か變つた態度を採るかと思つて待て居るんだらう。然だ手紙を取消すか知らと待て居るのに違ひない。所で案外今日、自分が手紙を遣らないから、明日は來るだらう。まあ良い夢なと見るとするぢやと、床に入つたが、眠には就けずして、何日よりも酷く今日の自分の仕打を責めるのであつた。嗚、小細工を爲ない

で、成行にさへ任して置けば、今頃は露子の家へ往て、あの可愛い聲を聞いてゐる筈なんだ。唯二度しか聞かない聲、今も耳に響いて胸を燃やす嗚其聲を。

考へりや考へる程自分が惡い、情ないが仕方が無い。我が惡いのだ。何う考へて見ても露子は我を愛して居る。否懸して居る。第一、自分と一緒に田舍へ往て夏を暮さうと云つたぢやないか。自分の收入はといへば、彼の必要どころか小遣にも足らないものを。其麼男と情にならなけりやならん理がない。さらば、露子の方には眞に附いた金づくの情を離れて、一寸中入に自分に因て眞正の情愛を得たいと思つた外、一點何の変りッ氣もないのである。夫を僅二日目に此希望をづだ〳〵に壞して了ッて、而して二晩得た其清い愛に對して、酷いゐぐり文句を與つたのだ。何たる事！奇怪至極、無情千萬だ。全體婦人に金

も拂つてないんだものの惡い事があるにしても、責める丈の權利は無いぢやないか。二日して退くなんて、勘定を拂ふのが恐しくて退く樣に見える。自分の露子を知つて居るのは茲に僅と三十六時間。情夫でわつたのは僅か二十四時。爲てくれた丈で隨喜渦仰して居べきを、却て全く自分の有とし、將來の財源になつて居る過去の關係を一切斷たせやうとしたのだ。考へても見るが可い。露子の方に甚麼惡い事がある？彼は或婦人の遣る通り、露骨て、直截に、憎體に、『今晩情夫が來るから』と言へば言へたのだが、其をいはず、我に花を持たせて、病氣と遣つたのぢやないか。夫で信用して置けば可いんだ。又散歩なら何も意地惡く安丹街を歩行かんでも、廣い巴里の街を何處なと歩行けば可い。其が可厭なら夜一夜友人と遊んで暮せば可。そして翌日定めの時間に行けば可いのだ。夫を爲ないで、オセロを

氣取つて彼を探偵した上に、もう遂はんといへば夫で重い罰になる意で居たんだ。罰になるか夫が？何うして却々。先方では切れて悅んでゐる。自分を此上ない白痴と思つて居るに違ない。手紙を寄さんのは恨んでゝはない。見下げ果てゝ寄さないんだ。

何か遣ひ物でも遣れば良かつた。然すれば自分の切れはなれの良い事は直くに知れる。而して露子を浮氣者として取扱つて、まづ借財はなくなる理だつたのだ。併し、假令少しでも商賣臭くなると誠に困る。露子が自分を想つた戀は商賣臭かつたにした所で、自分の露子に對して有つた戀、其は實に純白な、高潔な、崇高なのだもの、代價に積る事の能たものでは到底ない。其から受けた快樂は假令東の間だつたにしろ、之に報ゐるに奈何な高價の物を以てしても、到底其で償へる譯のもの

ぢやないのだ

と夜一夜悪事を言ひ暮らし、今にも露子の許へ行て此通り言はうと思つて居た。

夜が明けたが猶眠られないで、恐ろしく熱が出て思ふ事は唯露子の事ばかり。

今となりや男らしく、山とか川とか方を付けねばならぬ。見切る物か。逢ひに行くか。其一つだけれども御承知の通、人は決定るといふ事が難かしいのだ。室内に居る事は到底忍び兼たから、露子を訪れる決心ではないが、兎に角其方へ向けてやつて試る。然だ、やつて試た。自分が行て試た時分には何時も旨く行きや其は時の機と思つて居るので。

時は九時だつた、で直ぐにおてるを訪ねた。すると、『から疾く何御用？』と怪訝顔。自分は打明けて其用向を告げる事も得爲

ず、父の住で居るC行の馬車の席を買ひに往つた旨を答へた。

『此好い天氣に他所行なんて眞實結構ね。』

嘘つて居るのでは無いかと窃かに顔を見たが、全く眞面目で居る。

『貴君露子様許へ行て暇乞を爲る意ですか』と益眞面目。

『否。』

『夫が眞實だわね。』

『然だらうか。』

『當然ですとも、切れて置きながら何しに再度逢ふんです？』

『既う切れてる事知ッてゝ？』

『手紙を見せて貰ッたもの。』

『何て言ッてたへ。』

『おてる様、あなたの懇意な彼の方は眞實に失禮だ。誰しも如

悪な手紙を書かうとは思ふけれども、決して書きは爲ないッて。』

『甚麼調子で。』

『笑ひながら、そしてね、那の方は家で御飯も上げた友人だのに訪ねても來ないッて。』

手紙と悔氣で出た結果は其麼事か、我戀の自惚は手痛くも撲き著けられたのである。

『昨宵露子樣奈何してゐて？』

『オペラへ往たわ。』

『夫は知ッて居る、夫から。』

『自家で御酒呑んだの。』

『獨りで？』

『G伯爵と、でせう。』

さらば、自分が切れた處で、兎の毛の尖ほども彼の行は直りは爲ないのだ。『もう〳〵彼婦人の事は全然お忘れなさい。先方ぢや元來些とも思ッちや居なかッたんですから』ッて人の熟く言ふ事は眞實だな。

『まあ僕と切れても奈何もないので結構さ。』と自分は强ゐて笑ッて言ッた。

『エ、奈何もないのは當然ですわ。結局貴君は露子樣より地路過ぎたのですよ。露子樣は全く貴君に惚れて居たんですもの。此間中は貴君の事計、何一つ他の事を言いませんでしたよ。貴君の爲なら甚麼事でも仕出來すに違ひないと私思つてましたわ。』

『若し其樣に惚れて居たのなら、なぜ返事を遣さなかつたんだい。』

『那麼手紙を寄越されて見りや、貴君に惚れたのは間違つてたつて事が解りますものね、婦人と云ふものは、時によつては男に騙される事もありますけれども、自分の顔に泥を塗られりや承知しやしません。誰だつて貴君、情になつてから唯二日で、よし甚麼譯があるにしても、ぷいと拋り出されたら、それは怒りまさあね。私は露子樣を熟く知つてますよ。其樣手紙に返事書く暇があつたら、先ず喉を突きますね。』

『夫なら如何すりや可いんだ。』

『何にも無し。露子樣は貴君を忘れる。貴君は露子樣を忘れる。其で御互に言分なしでさあね。』

『だが若し僕が手紙を遣つて謝罪たら？』

『其麼事しちや可けないわ、露子樣吃度堪忍するつて言ふから。』

雞有ひ！おてるの首にしがみ着きも爲たい位だッた。十五分間後自分は再び我家に歸ッて、露子へ手紙。

『昨日御身に手紙を送りしを悔み、もし御身が許さしとならば明日巴里を出發せんとする人あり、何時頃御身の脚下に跪きて謝罪するを許さるべきや伺ひ度旨申居り候。

『いつ頃伺ひ候はゞ御ひとりにて居らせらるべきや。懺悔に證人は無用の事御承知と存候』

と此意味を碎いて書いて、樓助して之を露子へ直接に手渡しさせたが、後刻御返事と又も人とらしな。

大急ぎで中食する爲一寸出てがつて來たが、十一時になつても返事がない。もう待つまいと決心した、愈明日立たう、併し床に這入ても眠られる氣遣なし、仕方がない荷造でもして置くとしやうか。

（十五）

いざ出發の準備に掛かつてから、さだものゝ半刻も經たぬに、げたゝましく門の戸を敲く音。

『行て見ませうか。』

『ウム』と權助を出して遣たが、今時分來るのは誰だらう眞逆露子？とは思ひも初めなかつたので。

『旦那樣、女の方がお二人で。』と權助が入つて來るを續いて

『有馬樣、私等よ』と婦人の聲。ウム、おてるだわい。室を出て來るとおてるが四邊を眴しながら停て居る傍に、露子は丁度寢椅子に掛つて考へ込んでゐるので、我は其前の段通の上へ、ピタリと跪まづいて恐る〳〵手を捉り、譯もなく深く感動して唯一言『堪忍。』

彼は自分の額に接吻して。

『卿を宥すのも、是で佛の顏の三度目ですよ。』

『私は明日立つ筈だつたのです。』

『私が來たからつて何も變更なさらなくつたつて可うございんすわ。私は卿をお止め申しに來たのぢやないんですもの。』と恐ろしく改まつた言葉遣ひ『唯ね、今日中に返事をする暇はなし。然かつて私が憤つてると卿に思はれるのは可厭だつたし。おてる樣は邪魔になるだらうから來ない方が可いてつたんだけれども。』

『貴女が邪魔になるつていすか。エ、露子樣。奈何して？』

『否、卿が此家に婦人を置てらつしやるだろうからさ。』とおてるは口を挾んで『私だつて自分の旦那の所へ他家の婦人に二人も遣つて來られちや面白くないわ。』

とおてるが差擬あく喋舌る間、露子は注意して自分の顏を

凝視て居た。

『おてる様。お前様は眞個に人を疑ふにも程度があるよ』。

『併し好いお住居ね。居間だの寢間だの拜見しても可くッて？』

『エ、〳〵。』

彼は突と出て行つた。其檢査かた〳〵ながら、實は今の言過しに心付いて外らさう爲と、例の粹者丈に身を脱で差向にしたのである。

『何故おてるなんか連れて來たんです？』

『一緒に劇場へ往てたの。夫に此處から歸る時一人ぢや可厭だもの。』

『私が送ッちや可けないですか。』

『可いんだけれども、送つて貰へば卿歸るのは可厭だろうし、

戸口まで來りや必然這入らうとしふに違ひない。といつて入れる譯には行かず。斷れば又文句を言んだもの。』

『何故入れられないんです。』

『だつて私の身には丁と見張が附て居て少しでも疑はれりや大變な事になるんだもの。』

『眞實に唯其丈の譯？』

『他にあれば言ふわ。今となりやお互に秘しつこなしんだもの。』

『露子様。廻りくどく言ふのは嫌だから、言いたい通を言いますがね。全く、全く貴女幾分かは私を思てゝくれるんですか。』

『幾分處か大變。』

『なら何故貴女私を瞞しました？』

『有馬様。若し私が何某公爵の令嬢で、一年十萬圓の收入が有

て、夫で卿と善い中になつてゐながら、他に情夫でも拵へたといふのなら、卿が其を問ふのは當然よ。だけれども、可うござんすか、私は後藤露子、ね、二萬圓の借金背負て、自分の財つてば鏹一文なし、夫で一年五萬圓からの費用が掛るといへば、既う卿が尋ねる用もなし、私も返答する事は要らないわ。』

『左樣、其は本當です』と自分は我が首を彼の膝に載せつゝ『僕は貴女に首つ丈なんですから。』

『夫ならね、もう少し加減して惚れるか、もう少し私てものを知つておくれでなくつちや、あの手紙見て私は本當に困つたの。私が自由になる身體だつたら、第一まあ一昨日伯に逢やしないわ。若し逢ふにしても卿が今私になさる樣に丁と卿の許へ許可して下さいつて頼みに來る。で又このさき決して他の人と情交になりはしないわ。私も瞬時は半歳計其處いふ身の

上になつて、面白い目を爲やうと樂んでゐたものを、卿は可厭だつていふし——否、卿は奈何して然するつて肯なかつたぢやありませんか。何有其樣事位如何してするか直ぐ解るんだわ。其を爲るにしても卿が思ふよりは私は夫は大變な苦勞をするのですよ。那の時に私か卿に『一寸今十萬圓要るんだよ』つて言ふのは譯は無い事だし、卿は私に惚れて居るんだから奈何でもして都合して——よし後日其が爲に私を恨む事があつても——拵へたでせうけれども、私は卿に些とも心配させまいと思つたのね、其處の處、眞實だとか情だとか、卿は酌んで呉れなかつたの。私達のやうな婦人が些でも情を持つと、ちよいとした言葉でも、つまらん物事にも、他の婦人の知らん意味を付けて、而してテキパキと行て見せるんです。だからくどい樣だがいひますが、私は何一つ卿に明かさないで、借金辯濟したの

は後藤露子の方では立派に情を立てたんですよ。卿の方にして見りや、何にもいはずに其を受けて面白い目を見てさい居りや可いんでさあね。惜しい事に、今日卿か私に逢ッてたら、過般約束して置た事に付て、大變喜ぶ事が聞かれたのに。前の日には何を爲たんだか聞くどころの騒ぎぢやなかッたんだけれども。ね、時と場合では身體をいためて精、神の滿足を買ふ事も爲なけりや卿。夫を身體は投出したわ、後になつて精、神の滿足は貰へないわ、と來りや、全く立瀬があやりしないわ。』

自分は謹んで深く感に堪え、思はず顏を凝視めてゐた。昔ては其足にだに接吻したいと熱つた其人が、今は自分といふものを其心の中に置き、自分と共に生活したいと思つてゐて與れるのに、尙我は之で滿足しないのかと思ふと、人間の慾が自分の樣に手もなく滿足されて、否尙其上に屆いて見ると、一體

何處迄行けば際限があるのだらうと、むしろつくづく呆れ返るのである。

『全くね』と彼は言ひ繼いで『人間の一生は拍子もんだから、隨分浮氣な望も起るし、途方もない戀も出て、今日此方へ一生懸命になるかと思ふと翌日は彼方へ夢中になる。私等の許から何一つ持つて行かないで居て、身代を壞して了ふ男も有れば花束一輪で私といふものを全然取つて了う男もある。私等の心は夫は浮氣なもの、尤も其浮氣計が保養にもなり、氣休にもなるんです。ついぞ從來になく卿には疾く陷り込んで了たのは、何故だか卿解ッて？　夫はね、私が血を略て居るのを卿が見た時、私の手を把て泣たからさ。血の通ッてゐる人間の中で、私を可憫さうと思ッてくれたのは卿一人だからなのよ。氣狂染みた話だけれども、前に私小さな犬を飼ッてた事があるのず

るとその犬が私の咳をする度に氣の毒さうな貌をして私を見るの。獸の中で私が可愛がつたのは、後にも前にも此犬限。其が死んだ時、私お母に死なれたより甚く泣いたわ。だッて母樣はね、十二年の間ッてもの平素でも私を撲つんだもの。まあそれだから卿が一度で愛しくなつて了ッたのよ、犬の傳でね。男が涙の値打を知ッてたら、もッと婦人に可愛がッても貰へるだらうし、私等だッてさう酷くはしないんだけれども。

『那の手紙で卿の眞個の處が解ッたの。全く卿が人情が解らないんだッて事が丁と解ッたの。妾はこれ程情ないと思つた事はないわ。尤も那は甚助さ。だが手酷い意地の惡い甚助ねえ。手紙を受取つた時の悲しかッた事ッたら。十二時になッたら會ッて、一緒にお飯を食べて、逢はぬ昔しが懷しいッて位にもやく〳〵する胸を、逢つて晴々しようと思ッてたのに。私眞實に

口惜しかッたわ。

『私の心持では自分の勝手な事を考へて好な事を言へるのは、卿の前ばかしだと初めから然思はれたの。一體私のやうな婦人に交際ふ人つてものは、自分で些とした事を言ッても、夫を氣にして居たり、極滿らんことをしても何か旨い事になるだらう、か何か、必然思ッて居るもんなの。だから自然に眞個の仲好ッてものは出來やしないんだわ。私等に關係ふ人は私等の爲に大變なお財を費ふッてえけれど、實は自分が威張りたい爲に費ふのよ。如德人とだと向ふで面白がらなけりやならんし、向ふが物を喰お附合に此方でも面白がッてゐる時には、べる時には、此方もお腹の空いた態を爲ねばならず、向ふが疑ぐり深いから可厭でも、此方も御同樣に願はなくちやならんてな譯になるの。是で正直に情愛を有てたにや、夫れこそ好

い笑物處か滅茶〳〵に踏倒されさ。

『結句自分の體で自分の有ぢやないのね。然なのよ、人間ぢやなくつて非情の草木も同然さ。先方の自惚から考へられる日にや、眞先に撥へられて、思ッてくれる日になると一番後廻しと來る位、直個の情おんてありやしない。そんなら婦人の友人はッてえと、私も友達、私も友達ッて來る者は多寡ありますよ。だが皆おてるの樣な人計り。昔は依樣圓はれて居た者で、相變らず贅澤は爲たし、年齡が齡で左樣は行かずてッた樣な徒ばから、其樣のが私等の友人になる。友人といふよりは御假の時のお客樣さ。夫は〳〵卑しい根性で、一から十迄慾一方。早い話が卿に物を訓へるにしても、自分の得になる事でなけりや爲やしない。私等が五人情夫を拵へやうが十人に掛合はうがお蔭に着物を滿足に着られる間、私達の馬車に乘れて、劇場へ往

ちやロハの桝へ這入れる間は、決してお揃なしさ。私等が前宵使つた花飾は直ぐ今日持つて行く、肩掛は借りて行く、頭の物は勿論の事、假令甚麼に造作もない事でも其倍丈の禮が貰へると思はなければ決して爲やしない。現に先達ておてるに二千五百圓公爵から取つて來させた時、丁と二百圓貸したのを卿知ッてるでせう。あれで決して返しッこなしよ、返すにしても私が着ない樣な帽子の一つも寄すのが落さ。

『だから私にすると外に望を持つたところが、到底出來ッこなし。始終氣が滅入る性分だし、苦の絶へた時なしなんだから、一人丈私の身に付ては何にも嘴を容れず、私の體軀には惚れないで心に惚れて呉れる丈の優ッた男が見付けたい。と夫より外に樂みの道はなかッたのさ。すると恰度誹向の人が見付ッた。夫は那の公爵だけれども他の人はお老爺樣ね、白髮頭は頼

りにもならず、樂みにもならずさ。併し夫でも前には是で我慢が出來る事と思ッてゝよ。卿夫で良くッて？私は其時分肺病で死にかゝッて居たもんだから、どうせ死ぬなら火の中へ飛込んで焦がれ死したッて同じ事だと度胸を据えちまッて居る處へ、恰度卿に逢つたの――若い、逆上性の、嬉しい氣質だから、是なら前から欲しいと思ッてた人に爲ようかと一寸御座ッたッてな洒落で、卿を愛したのは卿ッて人其儘が御氣に召した譯でなく、此から仕上げて妾の思考通の人に出來る氣地だと見込んだからさ。所が卿の方で願下げとお出でなさる。其樣馬鹿な物になる俺ぢやあいッて威張るんだものして見りや卿も有觸れた男さ。だから他の人の通りに、お賓を拂ッて、夫でもう何にも言いッこなし。』

長々の打明話、疲れるに無理はない、ぐッたりと寢椅子にもたれて恰も咳上る咳を押へる爲に手巾を口に當てたが、軈て其餘を双の瞼へ。

『堪忍ね、堪忍』と自分は微かに『夫は悉皆解ッてたんだ。唯夫を貴女の口から聞きたくッて、つい、否もう何もかも水に流して了ッて、唯一ッ丈記憶て居て下さいね、御互に若くッて、御互に惚れて居て、御互に心を預け合たものと。よ、露子樣、貴女の仕たい通りに僕を爲て下さい。何でもいひなり次第、奴隷犬その通りになる。だが後世一世の御願、あの手紙を破いて、明日立たん樣にして頂戴ね、立てば僕は死んで了う。』

露子は懷から手紙を出して、微笑みながら自分に渡した。噫其笑の愛らしさ！

『丁と私返しに來たのよ。』

ズタ〳〵に引裂いて返して呉れる其手に我は接吻した。恰

も此時おてるが歸ッて來た。

『おてる樣、御覽、有馬樣が何言ッてるんだか知ッてゝ？』と露子がいふと、

『貴女に宥して貰いたんでせう。』

『然なの。』

『で堪忍して？』

『仕方が無いわ。だが有馬樣、尙望みがある。』

『おや。尙ッて何？』

『一緒に一杯飲みたいッて。』

『貴女承知したの？』

『何うすりや可いだらう？』

『眞個に二人とも小供だね。何にも解らないんだもの、お守役は困つちまうだが私も餘程お腹が北山なんだから、もう仲直

りが付いた事なら、早くまわ一口やる事さ。』

『さ、夫ぢや行かう私の馬車に三人乘れるから。』

『時に』と露子は自分の方を向いて『お夏もう寢てるだらうから、卿戸を啓るんですよ。さ私の鍵、此度は屹度失さないやうに』

自分は露子を抱締めた。殆んど彼の呼吸も苦しい位でゝへ

權助が、

『旦那樣、お荷物が出來ました。』と極めて滿足した顏色。

『全體？』

『ハイ。』

『ヨシ〳〵夫解いて置け、俺は既う立たんから。』

（十六）

戀の馴初は二言三言でお話する事も能たのですが、私が總て露子の言ひなり次第になり、露子が亦私とは切るに切られ

ぬ樣になつた經緯を詳しく申上げる意でつい長くなりました。

マノンレスコーを贈たのは丁度露子が來た翌の日の事です。

何しても露子の生活を變へさせる事は出來ないと彌見て取ッたから、此度は自分の生活を變へるに努めた。但し甘んじて受けた地位に思ひ到ると、非常の苦痛であるので、忘れても思はぬ樣にした結果、概して平穩な自分の生活が俄かに騷々しく亂暴に見える樣になッて來た。併し甚麼に慾を離れた戀にしても、根が圓者の情、一文も掛らないと思ッて下すッては大きな間違、花だ、劇場だ、一寸晩飯だ田舍行抔、情婦に强請られて否やは決して言へないので、此位物の掛る事は恐らくあるまい。

前に言つた通自分も少しは金が有つた。父は今も然だが豫備將校でC、に居るが元來地方では愛國家の評判者其お庇で現今の地位を得る保證金も借る事が能き、職に就てからは一年一萬六千圓約の收入、夫で前の負債も片付け、妹の結婚費も拵へた。自分の親を喪るも可笑いが、世の中にあれ位感心な人はあるまいと思ふ。死んだ母の財產が一年二千四五百圓宛あつたのを、官に就いた其日、自分と妹に分けて了ひ、自分が二十一になると、年々二千圓其上へ添へる事にしてくれて、これでお前が自分に醫者なり辯護士なり開業すれば、巴里で結構にして行けるからと、痒い處へ手の届く計で自分は巴里へ來て法律を修め、司補になつて、他の青年同樣、免狀迄は貰つたが其後は型の如く、のらくらして終に今日。

從來自分の費用は極少ないものであつた。唯一年の收入を

八ヶ月間に費つて了ひ、夏四ヶ月は父と一緒に暮す。是で正味一年ぎッと五千圓の收入に廻るが上に、好い子息ッていふ評判まで儲け、其他借金といつては一厘もなし、といふが露子と知合になつた頃の事。夫以來は、爲まいと思ッても盛に費用が嵩んで來た――いふ迄もないが――根が餘程浮氣な女で彼が欲しい、此が欲しいと總て此類の女同樣、猫の目程に變るのも一向費とは思はぬで成るべく自分と一緒に居たいものだから、毎朝のやうに手紙を寄して、一緒に御飯を喰ようつて來る。但し向の家でなく、料理屋とか田舍へ行く。自分も心は同一だから必ず行く、飯を喰ふ、劇場へ往く、事によると又晩飯もやる。と一日必然三四十圓一月積ると千圓から千二百圓位。かうなると一年の收入で三月か三月半位にしか引足りない。さらば借金か。其が否なら切れるといふ外はない。

如德詳細した事まで申上げて失禮ですが、つまり之が原因にあつて追々此先の幕が出るのです。凡て申上る事は眞實の事で、些も飾りなし。細な點も凡て有つた談を申上げるのですから、請願まあ御辛抱なすつて……

世の中に何があらうと露子を忘れる事は此時の我には出來ない。で如何かして費る丈の金の拂へる法を工夫しなければならん。夫れに離れて居る一分間は一年の樣に思はれるので、どうでも何か他の事に氣を入れていも居なければ到底露子と離れて居る譯に行かない。何うかして全然吾を忘れる事にしなくてはならん、と種々考へても見た。

最初は小さな資本を種に二千圓餘借金をして夫で賭博場へ飛込んだ。尤も賭場が壞されてから何家でも行て居る。以前にはフラスカチへ行きさへすりや一資產拵へられたもの。當

時は現金勝負で假令負けても、今日は運が惡かつたので、又取返す日もあるわ、と斷念る事も出來たが、今日はといふと、倶樂部では尙支拂方に何か規則があるから、別だが、他所では少し巨きく勝つと、屹度其は貰はれやしない。理由は言はずとも解り切つた事。

賭博を打つのは急に金の要る人、又は贅澤にして暮したし、といつて其丈の金はなし、といふ徒である。賭博を遣るだから金が無くなつて此始末、といふ人々がもし勝てば、負けた奴等の馬車代だの妾代を拂ふ事となる。實に感心しない話。借金はする知合になる論爭はする。人間名譽も品格も零だ。奈何に正直な人間でも何の惡い所もなく、唯一年十萬圓の收入の無いのばかりが瑕疵なる立派な紳士の爲に、滅茶〳〵にされて了ふ。其他胡麻化す、騙す、或は不意に高飛をした、繩に掛つたなど、お話し申す必要はないとして……

自分は此急劇な騷々しい人生の――噴火山――其中へ飛込んだ。前には其を思ふさへ身の毛立つたものが、今は露子の愛には必要な附屬物となつたので、如何でも爲ねば身の持樣が無かつた。といふのは露子の家に行かぬ晩、若し自分の家に眠ると、到底寢られない。嫉妬の蛇が首を擡げて、若い血と心を沸騰させる。所が賭博は此精神を喰ひ裂く熱を外へ向け、時計が鳴て露子の家へ行ける迄、知らず識らず、或る情の方へ心を引付けて、好いお對手をしてくれる。時が鳴ると一瞬間の猶豫もせず、勝つて居やうが負けて居やうが頓着なしで忽ち飛去す。跡に殘る奴等は可憫さうに、自分の樣に此を去て初めて眞の幸福を得るなんて事は出來ないんだ。大抵奴等の賭博は止む事を得ずなんだが、自分のは樂にするのだ。露子と切れゝば

賭博とも切れるのは勿論の事。

からやつて居る中にも自分は却々理性を保つて居たので、自分の力に拂へる丈しか負けず、勝つても又負ける丈にして置くといふ風所が却々運が好い。少しも借金にはならないで賭博を爲ぬ時分に較べると三倍の金が費へる樣になつた。是に至つて賭博も恩人、露子の涯限ない望に應ずる心易い方便となつて、彌止められぬ事となつた。露子の方では前と同樣、否寧ろ前より餘計に我を愛する樣になつた。

前にも言つた通り、自分は夜中より朝六時迄しか居る事を許されないので、夫からは劇場の拱を買はされるとか、又は露子が自分の家へ假を喰ひに來るのが常併し或日などは朝八時迄居つて、漸と露子の宅を出た事もあり、其次一度十二時となつても歸らぬ事もあつた。

所が露子には心の變化より先きに身體の變化が生じて我は直ちに介抱治療に任じると、露子も自分の心持を悟つて、感謝の意を表はす爲、優しくも夫に從がつたので、自分は別段骨も折らずに彼の舊習は大約改めさす事が能た。自分の醫者に頼んで診せると健康を保つ——即ち壽命を持たせるには唯靜かにして息ませるの外はないといふので、夜眠すに飲食する癖を改め、眠食共に生丁面に遣らせるやうにした。彼も好まぬながら遣つて試ると加減が良いので竟に此風に馴れて來て、夜になつても時々は家に居る。天氣でも好いとシオールに包まつて自分と二人子供の樣に、極樂街の暗處を散歩する。彼れが疲れると、手輕に晩餐を喰べて、寢る前に少時音樂を爲るか、本を讀むかで、此本を讀むといふ事は從來少しも無かつた事である。例の聞く度に自分の胸を貫くかの如く思はれた咳

辭も殆ど全く無くなつた。

六週間如恁して暮すとG伯爵の手は切れて了つて、自分の交情を秘さねばならぬのは公爵一人となつた。其公爵すら自分が居る時には、露子樣は眠て在らしッて起す事はならんと吩咐ッて居ますからとの口實で遂還されるといふ風。今は露子も自分に逢はねば居られなくなッたので、如恁好い結果もつまり病氣のお疵陰である。

自分は賭場を惜氣なく離れる。其が恰も巧みな老練の黑人がついと去る其時に當るのだから不思議だ。差引勘定して見ると、約四五千圓取て居る。見た所却々使ひ切れさうにもない。

さうかうする中に例に依て父と妹と一緒に暮す時候になつたが、自分は往かないので、交る〳〵手紙を寄して、來い〳〵と促す。出來る丈の智慧を絞て返事を書くが、其都度必ず極健

康で、結構で、金は充分に在る由を繰返して置く。如恁さへいふてやれば例年行くのが晩くなッても、父は吃度心配はすまいと思ッたので。

恰も此時、――夏の麗かな日だ、露子は映し込む日光に覺めて飛び起きつゝ、今日一日田舍へ伴れてッて頂戴な。

直ぐおてるを呼びに遣ッて、公爵が來たら餘り天氣が好いから、おてる樣と田舍へ行たといふ樣に、お夏に命を殘して三人出掛ける。

おてるを伴れるのは公爵の手前に必要があるのみか、彼は田舍へ遊出する爲に、別に仕上げた仲店のやうで、平素も變らぬ上機嫌と、奇體に又喰道樂であるので、一緒に往く者に退屈させる氣遣なし、卵、櫻實、牛乳、兎のうま煮、などの田舍料理を、數上ては無上に嬉しがつてゐるのである。

今は唯行く場所を定る計。これもおてるが苦もなく決定。

『眞箇の田舍へ行きたいんですか』と彼は訊ねるので、

『然よ。』

『然。ブーヂバルへ行きませう。有馬樣。幌無馬車を跳へて頂戴。』

ブーヂバルへ着いたのは一時間半の後。

其宿屋を御存知か知らんが、日曜日は庭で遊ばせて茶店を出し、其他の日は宿舍になる。庭は三階の頂上にあるが、眺望の好い事は素破らしい物。左はマーレーの疏水が地平線を限り。右には連山起伏して、遽々たる川は、四圍の靜かさに、遥もなく谷一面に白布を延べたる如く、風の柳の絲に搖られ、鳥の鳴く音の守り歌を添乳、水は自然の懷に眠つてゐる。向ふには暉を受けてくッきり見える白亞てら〳〵光る屋根瓦、遙かに見える工場の煙突は一幅の畫に見立れば、正に是れ一

點晴の趣。其向ふ、巴里は煙の中。果然、おてるの語の通り、此は本當の田舍、本當の遊山である。

自分はブーヂバルのお庇蔭で幸福を得たから言ふのではない、洵に此地は想像さるゝ限りの好い土地である。自分は隨分旅行もした。較べ物とならぬ位立派な物も澤山見た。が母の慈愛の山懷に、樂しげに笑つてゐる此さゝやかな谷にも優ッて可愛いゝと思はれる處決して他に無い。宿の主婦がボートは奈何と勸める盤に應じて、露子おてる大贊成。

人が田舍を說くによく戀を綴へるのは道理千萬で、人の愛する女、其尊き姿繪に額縁として、碧瑠璃の空、鬱蒼たる森、軟かな風、淋しい野原、花の色々、香の種々、是程適切のものはあるまい。奈何に女を愛して居ても、奈何に信じて居ても、奈何に從來が爾來を保證するにしても、尙多少、嫉妬といふを免かれない

若し人を戀はゝ、心も身をも預ける人を、此人の世から引離して了はねば氣が濟むまい。奈何に女が周圍の事に無頓着で、も、人に觸れ物にさはると、幾分か女の匂も脫け、實も減る樣に思はれるであらう。我は最も深く之を感じたものである。自分のは、恐常一樣の戀でなく、人間の力に及ぶ限りを以て戀をして居る。が、對手は椿姫、巴里に居やうものなら、逢ふ人、觸る人、悉く忌れ、昔の情夫か、乃至盟日にも非になる人かも知れぬ。然るに田舍へ來れば、見た事もなく、關係もない人にのみ交はり、美を盡した非の天地の眞唯中に、市中の物の響を避けて、恥もなく怖れもなく、恋まゝに戀をするを得るのである。

少しづゝ、園者の趣も消えて、我が傍に居るのは、自分の惚つてゐる、自分を慕つてくれる、孫子といふ、若い可愛いゝ美人、從來の事は夢と消えて、將來に一點の雲もなし。太陽も我が戀人

若若し人を經はい心も身をも預ける人と、此人の世から引離して了はねば氣が濟むまい、奈何に女が周圍の事に無頓着で、人に觸れ物には觸れるであらう、我は最も深く之を感じたものである、自分も感はれるのは寒暖一樣の感で、人間の力に及ぶ限りを以て戀をして居るが、對手は佛蘭巴里に居やうものなら、逢ふ人、鬪る人、悉く是れ昔の情夫か、乃至愛人にも其になる人かも知れぬ然るに田舍へ來れば、見た事もなく、關係もなく、人にのみ交はり、美を感じた春の天地の眞唯中に、市中の物の響を避けて、恥もなく怖れもなく、思ふに任せて戀をするを得るのである。

少しづゝ、圖者の感も消えて、我が傍に居るのは、自分の戀つてゐる、自分を慕つてくれる、孫子といふ、若い可愛いゝ美人、從來の事は夢と消えて、眼前に一點の雲もなし、太陽も我が戀人

の上に、最も純潔な花嫁を照すが如く輝いてゐる。手を携えて二人行けば、其景物の美しさ、ラマルチーヌの詩を憶出させん、スキユードの歌謠ひ出させんとて故意に拵へたかとも見える計。

露子も白い着物を着て、自分の腕に縋りつゝ、昨日自分に語つた事を、又此星の花輝く夕、飽く色もなく繰返すので、吾等の若き戀の光ある畫の上には、怖ろしい夜の神も其夕の暗き影を投げず、世界は吾等を殘して廻りつゝ行くのである。

舟から上つた毛氈の樣な花の席に、樹の葉を漏れて映す日に照されながら、如恁夢を見て我は遠く人の世の羈絆を離れ、恣まゝに現はれ來る希望の中に遊んでゐるのであッた。

自分の立て居る處から、河岸に建た小な二階家が見へる。其前の半圓形を成た手すりの隙間から、天鵞絨の樣に滑な青い

池生家の背後に小さな森、其所々に神々しく凹んだ所が見へる。其處に線を延べた苔の蹤は、晝間踏んだ足痕も、夜の間に生ひ伸びて、消して了うだらうと思はれる位。中に人は無くて花を飾った點が戸口から縺はつて二階まで攀ッて居る。

一心に凝視て眼を放たず、餘り久しく視て居ると、竟には離れがたく、苑がら自分の有の樣に思ふ位。今見た夢を容れるに一點の申分がない。と思ひ初めると、露子と自分とが其處に住ッて居て、蓋は小高い山に茂ッた小さな森の中を逍遙ひ暮て は絹の樣な草の上に座はる樣な、嬉しい、恰しい言ふに言はれぬ境涯が思はれるので。

『何だッて好い家だらう！』と露子が、自分の凝視て居るのを見て如慈叫んだ。——或は自分の胸の中まで洞察たのかも知れぬ。

『何處に』とおてるが訊ねると、

『其處さ』と露子が其を指した。

『アラ、全く好い事ね、貴女氣に適ったの？』

『甚く氣に適ッ了ッてよ。』

『そんなら公爵に然仰有いよ。買ッて下さるわ、必然。何なら私が一骨折りませう。』

露子は我が意見を訊ねる如く實際を顧眄ッた。が、自分はおてるの言葉に美しい夢は破られ、ハッとして耳も鳴る計なので『ム、其は良からう』と口から出任せ、實際は何を言つたのか知らなんだ。

『夫なら私整然と良くするわ。』と露子は自分の手を離し、我が言葉を遮ッた『貸家かしら、一寸往て見よう。』

家は空いてゐる玄關の所に貼札が在て、貸家、家賃は一千圓

也。

『卿此家氣に適ッて？』と露子は又自分に訊く。

『僕が氣に適つた所で、僕が此家へ來られるんだか何だか怪しいもんだ。』

『悠らしい事、卿の爲でなくつて誰の爲に私が如恁田舍へ爛ぶりに來るんだよ！』

『夫なら露子僕が借りやうぢやないか。』

『解らないね卿は、餘計な事だし莫迦に劍呑だわ、其樣事をすりや私は唯一人しか其麼事して貰ふ事は出來んて事は卿熟く知ッてるんぢやないか。抛棄て置きや可いんだ。默ッて見てお在よ、お坊樣は温順にしてさ。』

『然なればね』とおてるが『もの丶二日も身體が空てる日があつたら、私來て三人で遊びませう。』

『打連れて家を出て思ひ付を繰返し語合ひつ丶巴里への歸途に著いた。露子を双の腕に抱きつ丶馬車から下す時分には自分ももう左程彼の考を否まぬ樣になつた。

（十七）

翌る日は疾く公爵が來るから歸り次第手紙を出して、晩には屹度逢ふといふので朝疾く歸されたが、其日果して手紙が來た。

『今日公爵とブージヴァルへ行きます。暮方八時におてるの處へお出でなさい。』

其時間に露子はおてるの處へ來た。

『アノ、那は全然極つたわ』と露子は戸口を這入りながら上機嫌。

『家借りて？』とおてるが受ける。

『ア、直ぐ承知してよ。』

自分は公爵は恐れないが其人を欺くと思ふと恥かしい心持がせられる。

『其他にまだ良い事があるのよ。』と露子はさも嬉しさう。

『何、其外ッて？』

『有馬様の居る所を見たの。』

『那の家の中で？』とおてるは笑ひながら。

『否、ボアンヂュ、ジュールでさ。午飯を彼家で喰べたから、序に公爵が景氣に見惚れてゐる中に、何處か都合の良い室は無いかつて、女將に聞いたの。すると見せてくれたのが宛で切て嵌たやう。應接の間、次の間、寢間とあつて月二十五圓。晴々した室計で氣の利く人なんぞ持て來いなんだから、私借りたの。可くつて？』

自分は失庭に首を抱いて接吻した。

『本當に好いのよ』と彼は續て『卿に勝手口の鍵を呈て、公爵に表門の鍵を上げる樣に約束したの。だけれども彼の人は晝間來るんだから必然取りはしまい。私が如恁物數寄を起して暫時巴里に居なくなると彼の人も餘程都合が好いんだわ。私がゐなくまりや、家の人等が云々言はなくなるからねえ。だけれども彼の人不思議がッてるの。何故那麼に巴里が好きなものが、奈何してまあ田舍へなんぞもぐり込む意になつたらうッて、不審を打てるの。私はね、加減が惡るいから、身體を休めたいんだッて然言たけれども、何だか怪しく思つてるらしかッたわ。可哀想に、年が年中見張をしてさ。だからねえ、有馬樣、餘程氣を注けないと危いのよ。必然田舍にゐる間番を附けて置くんだから。夫れでね、家借る計でなく私の借金を拂はしてやるの。

お氣の毒に又澤山有る奴さ。卿其で可い事？』

『ム、』

自分は如何風な事を爲るのは隨分躊躇するので、努めて其を抑へんとしつゝ如何答へたのが漸とであつた。

『家中全部見て置いたし、私悉皆悉然と拵へる意で、公爵に一切爲る事にしたの。一寸卿』と露子は自分に接吻しながら『卿幸服よ。贅入仕度の後見に百萬圓の金持が附てゐるんだもの。』

『貴女何時其家へ轉るの？』とおてるが口を挿た。

『成る丈早く。』

『馬車も持て行て？』

『何も彼も持て行くの。私が不在の間貴女家の番して頂戴。』

善は急げと追立てゝ、彼が田舍へ移ッたのは僅か一週間の後、自分も同じくボアンデュジュールへ移ッたは勿論の事。

此からの生涯は充分御話を申すのは難かしい。初めの間露子は所こそ變ッたが生計向は以前に變らず、家は常住開ッ放しで、知ッた女は交る〳〵來る。全一月の間、八人なり十人なり、客が食堂に絶えた事なし。おてるは又自分の知つてる者とさへ言へば伴れて來て、宛がら自分の家の樣に纏綿をする。

連日の宴會その費用は皆公爵の懷から出るのである。處がおてるが露子樣からのお使といふ口上で時々來ちや五百圓位宛持て行く。御存知の通自分は賭博で幾何かの金を持つて居たので、露子の爲と請はれるまゝに、直ぐにおてるに渡して了ッた。若し此上自分の懷に無い樣な額を無心されちや大變だと思つたから、前に借りて了度返して了ッた丈又借り入れる事にした。乃で又舊の通り定まつた收入を別物として懷に五千圓計。此なら當分耻掻く事もないと一安心。然るに露子も

友人に逢ふは面白いが、其には費用が掛る、殊には時に因て自分に迄心配させねばならんといふのが大分心に當つたと見へて、友人を呼ぶ事も餘程少なくなつて來た。家を借て遣た公爵も來て見ると、大勢が大陽氣に騙いでいるので、此頃ふつつり來なくなつた。何日だつたか、夕方、食堂には笑ひながらの話飯を伺終らない十五人といふ大勢が殘つて居た。公爵素より其樣事とは夢にも知らず、ツカ〳〵と來てぐいと開けると、一度にどつと笑ひ出されて、朝の體に引返した。跡には婦人達の鋭い笑ひ聲。露子は心も安からず、卓を離れて次の室にゐる公爵の許へ駆け付け、力の限り慰め樣としたが、老公威嚴を損せられたので、酷く露子を恨み、常になく聊か手酷い言葉、乃公の家の家根の下で主人たる乃公を尊敬させる丈の事をさへ能う爲ない樣な婦人を、馬鹿遊させる爲に、大金を拂ふ樣な事

は、既う〳〵今日限り出來ん。と甚く憤つてお歸り。其日限りそよとの風の便だにない。

客も寄せ付けず、生活向もがらりと變へた。が、公爵よりの便はない。自分にすると我が戀人が今は專ら自分の有となつて、結句自分の夢が本當になつて來たのである。露子も今は自分と別れては能う生きてゐなくなつて、末は何となるか頓着せず、大べらに自分との中を表向にして、愈同居する事になり、召使の言葉までが今度は本當に旦那樣。

おてるは此の遣方については酷く說法したが、露子は中々肯かず、私は那の人に惚れて了つて、那の人に別れるなら生きてゐられやしない。將來なんぞどうなとなれ、奈何事があつても那の人と始終一緒にゐる樂には代へられないんだから、私の仕方が氣に適らん方は、とつとと御勝手にお歸り下さるが

可い。と見厭ぎるべからず。是はおてるが大變な用事で話があるからと、兩人閉切つて話をしてゐるのを偷聞した一節なんで。

程經ぬ間再びおてるが來た。自分は恰度庭の向ふの端にゐたので先方では知つてゐない。露子の窃と出て迎へる態度は何にしてもまた其麼談話に違いないと見て取つたので、何といふか聞きたくて堪らず、良い所に立聞きしてゐると、二人は知らずに應接室を閉切つて案の定。

『どうなつて？』先づ露子が問掛けた。

『公爵に會つたの、私』

『何ッて言ッて？』

『先達の食堂の一件は悦んで堪忍すると、併し有馬春太郎といふ人と大ッぺらに一緒に暮してるッて噂だが、其は決して、

許さない。で如憑有仰の露子に其男と切れろッて言ッて下さい。然したら以前通り一切要る丈は爲てやります。若し切れんとなら、一厘たりとも乃公の處へは決していふて來なッて。』

『で貴女何ッて言ッて？』

『お思召を申聞けませうし、露子樣からも既う少し譯の解ッたお返事をさせる樣に致しますッて約束して來たのま一寸考へて御覽ね露子樣、貴女が今此金の蔓を離して、有馬樣で其代が取れゝば可さげれども那の人には能ないんだから、其丈でもお考へよ。有馬樣はそりや心から貴女に惚れてゐるさけれども貴女の要る丈の費用を供給ふ財產ッたら一文もしだらうぢやないか。齒切したッて地團太踏んだッて晩かれ早かれ有馬樣は貴女と切れなくちやならん事になる人さ。其時になつて騷いだ所で、もう公爵は何ともしてくれはしないから。

私が有馬樣に話しやうか』

露子は何にも言はぬ、定めし考へてゐるのであらう。動悸は劇しく膊つ。何と言ひ出すか眞に氣が氣でない。

『有馬樣とは私切れないわ。』先づ一聲。何たる難有い聲だらう！『彼の人と一緒に暮してゐる事を秘すのは可厭なんだわ。勿論其は馬鹿な話だけれども、私全く惚れてるんだからね。又彼の人にしても既うかうやつて始終二人で一緒に居馴たんだもの、一日の中に一時間だつて離れて居れッてのはそりやわんまり酷過ぎるわ。顏を見た丈で自分もお婆樣になるやうな氣持のする人の機嫌氣褪を取らう計りに、其迄の辛い目を仕なけりやならんッて程長生は私よう仕ないんだよ。まあ公爵もお金を費ひなさらん方が良がらうしさ。私も又お金なしでやッて行くから。』

『だッて貴女何うするの？』

『何うするか妾だッて些も知りやしないわ。』

おてるが正に何か答へやうとしてゐた處へ自分は不意に其場へ飛込んで、露子の足下にひれ伏しさま、かくまで慕はる嬉しさの餘、涙連頻と彼が身に濺ぐのであつた。

『露さん！僕生命を呈る。公爵なんぞ要はない。僕が在る。僕が見棄ると思ふですか。此、此幸福、此御恩、どうして返せるでせう。露さん！眞に慕ッて、堰かれずに慕ふ。跡は何有掃ふもんですか。』

『然よ、私眞個に好きよ。卿眞個に。』と彼は兩手に自分の頭を抱いて低聲に語るのである。『私や如恁に深くならうとは、夢にも思はなかつたの……良いわねえ、二人で地味に暮せば、私昔を思ふと恥しくなるわ。もう決して那麼事はしないわ。昔の事

は堪忍して頂戴。よう卿、よう！』

涙が聲を遮つた。吾は唯彼の手を緊手と握つて、胸にぴつたり宛がつた計り。

露子はおてるの方に向て、詞も途切れながらに。

『アノ歸つて此光景を公爵に言つて。私はもう公爵に用はないつて。然言つて頂戴。』

此日きり公爵の噂をきかず。露子は全然死人となつて、自分が初めて見た時分の品行は、嚴に避けて、其思出させる樣な事すら、暖氣にも出さない。姉妹が兄弟に對して親切であらうか、妻が夫に仕へるが奈何に忠實であらうが、決して露子の自分に盡くす心の細かなには及びもない。今は前の友人も棄てた。品行は勿論、言葉も直し、贅澤も止して了つてとんと別人。新たに買た美しい小艇を河に浮べんとて出て行く時、白い著物に

麥藁帽子、水のかゝらぬ樣にと小さな絹の外套を提げて行く婦人を見て、此が僅四ヶ月前には、他かぬ贅澤に世間の眼を驚かし、其品行に譏を招いて、常に巴里の噂を釀したその椿姫、後藤露子とは誰あつて思ふものあるまい。

全二ヶ月、一度も巴里へ行かず。誰一人訪ふ者もなし。唯おてるとお百合子が時々來るばかり。百合子の事は既にお話を爲たが、後に露子が其所にある手紙を書かせた女。

自分は終日露子の側を離れた事なし。或は庭に臨んだ窓を開けて、夏が盛の色を咲き揃ふ花に誘るを眺め、或は綠なす木の下に踞坐しつゝ自分も露子も曾て知らなんだ眞誠の生涯を味ふた。

露子が極小さな事に悅ぶ狀は宛で小供そのまゝ。麗かな日、十歳か十二歳の小供の樣に、蝶や蜻蛉を追ふて、庭を走り廻る

事もある。頭を飾る花のみに、一家豊かな生計費よりは多くの金の掛つた此婦人が、我名に因む露草を凝視めて、一時間も芝生の上に坐つて居る事さへあッた。

彼がマノンレスコーを繰返して讀んだのは此時で、熱心に書入をしたのも度々たが『婦人が眞實に憶れば、マノンの樣な事は出來ん』と平常公言して居た。

公爵は二三度手紙を寄せた。露子は書體で直くに夫と悟り封をも切らずその儘自分へ渡す。時には其文言の哀さに覺えず我は涙催す事かあッた。初めは金さへ出さねば夫で露子を引戻す事の能るものと思ッてゐたのだが、此術で往かぬ事を悟つて、最早我慢か出來なくなつたと見へ、何んな條件が附かうと擇はぬから、前同樣唯逢ッてくれと、いと切めて賴んで來るのである。

忍ぶに餘る切な心を、繰返し訴へて來るあはれさ。我は痛く動かされて、寧此を露子に告げて、再公爵に逢ふ樣に勸めやうかと思ふ迄にはなつたものゝ、若しまた逢へと勸めたら、却て唯逢はせたいと計りでなく、一家の費用を公に負擔はせる意と思はれはすまいか。此戀の末、愈首の廻らぬ樣になつた時、重荷を他人に擔はせるやうな根性があると思はれは爲まいかと、心には濟まぬながら、何にも言はず、到頭引裂いて了ッたので。何の返事もあいものだから、公爵も愈見切ッたか、既う手紙を寄越さず。露子と自分は若氣の戀に些か將來の憂もなく、まこと野中の極樂鯖蛤。

（十八）

新世帶での出來事を、一々細かに御話し申すは却々困難。總て兒供の飯事のやうで、自分等二人には嬉しい面白い事なが

ら、他の人には極満らん事ばかり、惚れて惚れられた味、一日の日の暮れる早さ、知らぬ間に明ける夜の短さ、互に思ひ互に信じて、深い劇しい戀の中には、苦勞も論爭も、束の間に忘れて了ふ不思議さ、是皆素より御存知、自分等の眼から見ると惚れられて居ぬ人とあれば御話にもならん不用者に思はれて、皆て他の婦人を捕へんと、心の罠を設置たのを悔み、將來又奈何な天地の變化あらんとも、今自分の手の中に握つて居るのより異つた手を、洒落にも握る事のあらうとも思はれない、我が心は絶ゆる間もなく一つの事に奪はれて、何物が來ても奪ひ去るに足らず、勞働も手に着かねば昔の事思ひ出されもせず、唯毎日、毎日我が戀人の上に新らしい魔力を見出し、新らしい媚を發見する、命、其も唯此望を滿たすものに過きず、我が心、此も戀の靈火を燃し立てる竈としか思はれぬ。

二人手を携へて家の後の小さな森を逍遥ひ、茲に座つて、夕の音の靜さに耳澄ましつゝ、二人の胸に同じ事を考へたのも度々である。終日日の光を厭ふて起き出でぬ事もあつた。窓掛を下て了へば浮世と云ふもの二人が前には無なつて了ふので、此中に入るを許すのは唯お夏ばかり。これも食膳を運ぶ時のみで笑ひさゝめきつゝ食事を終ればまた暫く寢る。戀の深海の水底深く、心の珠を探る二人は珊瑚眞珠の美しさに歸るを忘れて、時々息休めに日の光拜みに來るのみである。

如恁睦まじい中にも時々露子は甚く悲いで、涙をさへ零す事がある。驚て因を聞くと、

私等の戀は他の人の戀の樣ぢやないんでせう。ねえ、卿は宛で私が從來に一人も男がなかつた樣に可愛がつて下さるんだけれど、若し此後、滿らん者に惚れた」とか「以前は露子如恁事

を爲た」とか思つて、舊の苦海へ拋棄る樣な事ひよつと爲さりは爲まいかと思ふと、妾心細くつて。知らん中は左も右、今の樣な生活の味を覺てから再那廢事を爲りや私は死ぬわ。ね、卿、必然見棄てないからッて言つて頂戴。』

『嘗ふ、必然。』

聞くと我が嘗の眞僞を讀まんとする如く、自分の眼を凝視めて居たが、矢庭に我手に縋り着いて、頭を胸に押當てつゝ、

『奈何に私が惚れて居るか卿知らないわ！』

ある夕暮、窓の外面の廣樣に座つて、月が雲の襖から、さも可厭さうに起きるのを見つゝ、木葉に荒れる風の音に耳傾けて、互に手をとり交した儘、約十五分間も無言で居ると、露子がふと思ひ出した樣に、

『もう多になるのね。何處か遊びに行かうぢやありませんか。』

『何處へ。』

『以太利。』

『此處は飽きたのかへ。』

『私多が怖しいの。夫に卿が巴里へ歸りやしないかと思つて一番氣になるわ。』

『何故？』

『種々所以があるの。』

其理由は言はずに、隅はず續ける。

『ね、往かうぢやありませんか。私の物皆賣つて、以太利へ往きませう。彼地へ往けば私は生れ替つて、誰も私の事を知つた者はなし。卿可厭？』

『往くとも、お前が行きたけりや。勿論行くさ。けれどもお前の物を賣るには當らない。歸つて來りや依樣在る方が好からう。

僕は其の大きな犧牲をして貰ふ丈の財産はないが二人、五六ヶ月位立派に旅をする丈は持て居る。お前さへそれで良ければ。』

『依樣不可のよ。』と彼は密際を退いて室の向側の寢椅子に座りつゝ『何にも他國へ迄お金を費ひに往かなくつたつて可いぢやありませんか。かうして暮してる丈で隨分掛るんですものの。』

『左樣叱言を言はなくつたつて可い。お前は餘り酷いよ。』

『ア堪忍して頂戴ね。如何樣罰陶敷お天氣は眞箇に氣分に障るのよ。思はん事を言つたりして、私は。』

彼は自分を抱緒めたかと思ふと、恍惚となつて多時物思ふらしい風情。

如何樣事が屢々あつた。原因は解らんが何れ將來不安心な處

がある、に違ひないとは知れる。我が愛の日毎に高まり行くは彼れにも顯然と見へるのに、尙始終鬱いで居て所以を問へば、身體が惡いとか、天氣が變だとか、ひふの外、他の理由は言はないから、結句生活が單調なので倦きが來たのだらうと思つて、度々巴里へ歸らうと云ひ出して見たが、平常之を否んで、何處へ往ても田舍に居る程面白い事はないと言張る。

おてるは既う滅多に來なくなつた。が手紙は始終來る。自分はついぞ文言を見た事はないけれども、來る度毎に露子が深く物思に沈む容子は明かで、何だか薩張解らない。

ある日露子は其居室に居て、自分が這入ると手紙を書いて居た。

『何處へ手紙を遣るの？』

『おてるへ。何を書いてやるか卿見たくッて？』

聊かでも疑惑を懷く樣に思はれるがつらさに、此を見れば彼が斷ぐ原因は直ぐに解らうにとは思ひながら、敢て見ようとは思はぬ旨を、忍んで答へた其心地！

『翌る日は眠の覺めるやうな上天氣。露子はボートでクロアシ山の島まで往かうといふので、二人で往たが、此日は頗る怕しさうで、歸つて來たのは五時頃であつた。

『春田樣が光來ましたよ。』『自分等が這入るとお夏が報せた。

『でもう歸つて。』露子が問ふと

『エヽ、馬車に乘つて。あの事は調ひましたつて。』

『フム可矣。御飯』と極めて鈍鈍である。

此から二日過ぎておてるから手紙が來た。こヽに二週間ぶり露子が始終兒せゝといつてゐた不可思議な愛の雲始めて晴れて、漸く舊の活々した元氣になつた。然るにまだ馬車は

歸らない。

『お照は何故馬車を還して寄さないのだへ』と一日訊ねると、

『一匹の馬が病氣だし、馬車も損じた所が出來て、直して居るの。此地に居て馬車の要らん間に直さして置く方が、巴里へ歸る迄待つより可いわ。』

この後おてるが來て露子の答の僞でない趣きを自分に確めて、露子と打伴れて庭へ散歩に行たが、自分が後から出て行くと俄かに話頭を轉じた風。此日おてるが歸り際に、恐ろしく寒いからとて露子のシヨールを借りて歸つた。

如態事で一月も經つたが露子は從來になく快活で、情愛は日毎に深くなりまさるけれども馬車も歸らず、シヨールも戻らずであるので、思ふまいとしても氣懸りで居れなくなつて來た。幸ひおてるの手紙を入れた抽斗を知つて居るので露子

が庭の向ふの方に居る時を考へて、素早く抽斗に近きさま、開けやうとすると、無益、錠が下りて居る。次に頭の道具寶石類を入れる抽斗を開けると、此は苦もなく開いた。が寶石等は影も見へぬと思ふと怖の念が氷の刃に刺す如く！何故失なつたらう。問ふて見ようか。無益、言はないのは解り切つて居る。

『ねえ露子、僕は一度巴里へ往きたいが遣つておくれでないか。家の者は此處の宿所を知らないから手紙を送つて來ないので困る。吃度親爺の處から僕に來いつて手紙が來て居るに違ひない。心配してるだらう。返事を出さなくちやあ。』

『往て光來いですが直ぐにお還なさいよ。』

自分は直ちにおてるの處へ往た。顔見るが否や、

『オイ、打明けて聞かして呉れ。露子の馬は何處に居る。』

『賣つたの。』

『シヨオールは』

『同斷。』

自分は急き込んで

『金剛石は。』

『一六銀行。』

『其を賣たり質に入れたりしたのは誰だ。』

『私さ。』

『何故其を僕に言はなかつた。』

『露子樣が決して言ふなつて口留したんだもの。』

『夫なら貴女何故僕に金を出せつて言はないんだ。』

『露子樣が爲せないもの。』

『で其金は何うしたの。』

『借金濟さ。』

『借は澤山あるのかい。』

『一萬二三千圓よ。だから私が言はない事ぢやないんだのに、人を疑つてゝ。今眞實ッて事が解つたでせう。公爵から拂ふ約束になつて居た道具屋が先達て公爵の處へ請求に行くと、立關拂を喰つ了て、翌る日手紙で一切露子の事には關係致し不申つてきつぱりお斷りさ。其から大騒で、拂つて呉れつて、喧しく言つて來る。是は、卿から二三千圓貰つた中から內入にして遣つたので漸と納まると、誰かおせつかいな奴が其道具屋へお喋舌をして、露子樣は既う公爵に棄てられて、一文なしの青二才と暮して居るつて、告げ口を爲たんだわ。他の貸主も同じ事を聞き込んだもんだから、どし〳〵請掛けて、果が差押さ。露子樣は爭何も彼も賣つて了うつて云つたんだけれども、跡の祭。尤も賣るとなりや、私も止めるんだつたが、まあ賣らんつて事になつたものゝ、拂ふ方は放棄つちや措かれず、貴君に頼むのは可愛想だしてんで露子樣馬は賣る、ショールは賣る、寶石は曲げるつて騒ぎでさあ。受取證見せませちか。』

おてるは抽斗を開けて受取證と質札とを示し、そら御覽なさいといふ調子。

『貴君は唯惚れて田舍へ往つて夢の樣に暮して居れば可いと思つて居るんでせうが、夫ぢや無益よ。貴君、然いふ氣樂な粹な世界の裏には依樣金の浮世つて云ふものが必然伴て居て、美しい戀の世界も絹糸どころか切ても切れん鐵の鎖で浮世に繋て居るんですよ。當然なら露子樣は貴君の目を從來に十度も二十度もくらまして、隨分働きをする筈なんだが、彼の娘が普通外れた性質だから、夫も爲なんだのでさ。一枚脫ぎ二枚脫ぎ、然う裸躰になるのを可愛想で見て居られるもんですか、

私が口を利くのは無理はないのよ。併し先も露子様は奈何しても承知しない。貴君に首つ丈だから、命にかけても貴君の顔へ泥を塗る様な事は爲たくないつてえの。夫は良いさ。怖ろしく粹さ。だが粹は一向お掛取様の方に通用しないんだから、今の所壹萬二千圓出來なけりゃ借金が脱けないの。』

『フム、宜しい、僕が夫れ丈け出さう。』

『貴君借金するんでせう。』

『何有、まあ、然さ。』

『夫も良いでせうよ。父君と仲違になつて、金の蔓には泣き別れ。加之に壹萬貳千圓といやあ、おいそれつて右から左に出來るものぢやなし。私は間違つた事は言はない。有馬様、私は婦人に掛けちや貴君より黒いから、惡い事は云はない、其麼馬鹿は爲さるな。必然悔む時があるから。餘りな事は爲ん方が可うご

ざんすよ。何も私が露子様とお切れなさいつてんぢやなし。初めの様にして居らしやい。然したら露子様が此塲を切抜ける事は出來るんだもの。第一公爵の撚が直ぐに戻るし、N伯爵だつて、露子様さへ承知すりや全部借金拂をして、月々二千圓宛出すつて、昨日も伯が然言ふの。那の方一年十萬圓の收入なんですから露子様には夫こそ結搆でさあね。おんけらかんと身代限になるまでやづ〳〵して居るのも餘り器量が惡いぢやありませんかN伯はお仕着通り鈍に出來上つてるんだから、貴君は依怙露子様の情夫になつて居たつて些も仔細ありやしないわ。そりや露子様は初には泣くでせうよ。けれども終には慣れて來て、貴君も早晩私にお禮を言ふ日があるに違ひないのさあ露子様が結婚して居るとしても、他に男を拵へる。其丈の話でせう。既うこれは前にも一度言ひましたわね。だが

其時はホンの心付、今は然爲なくちやならん破目になッたんですよ。』

おてるの言ふ所は無殘にも眞理で、何と言返し樣もない。彼は今見せた書類を片附けて又續ける。

『此が普通なんで、露子樣の樣な婦人は平常でも誰かに惚られる、但し自分は惚れないつて事を慥かに知つて居るさもなければお金を蓄めて、もの丶三十にもなれば好いた男と世帶有つ位の味をやるんでさあ、私だつて今丈の智慧が往時有つたら、如德はならんのですよ。左に右、露子樣には何にも言はずに、唯巴里へ伴れてお歸りなさい。既う差向で五月計も世帶したんだから夫で澤山。可い加減に目を塞いでね、誰だつて今の處然しろつて言ふに決つてる。巴里へさへ歸りや、もの丶二週間も經てば露子樣は吃度N伯をお客にする。冬の間にせつせ、

とお金でも蓄めて、夏になつたら貴君が又初める。是が直箇の魂膽でさあ。ね、有馬樣。』

自分の憤り振むにも拘らず彼は其立案に甚く滿足して悅ぶ樣子。

我が戀も之を許さず、我が品格も之を容さぬ。露子の今の心で見れば、他の男に見へんよりは、寧進んで死ぬに進ひない。然だ、と自分はおてるに向て、

『笑談はもう澤山だ。幾何要るんだ精確した所を聞かしてくれ。』

『言つたぢやありませんか。一萬二千圓。』

『何時要るの？』

『來月中。』

『可笑、僕が出すよ。』

おてるは肩を聳てゝあきれ返つた。

『お前に渡さうが僕から貰つたつて事を決して露子に言はない樣に。吃度だぜ。』

『大丈夫。』

『若し又他の物を貰るとか質に遣るんだつたら知らしてくれ。』

『既う其處心配なしよ。何にも殘つたものはないんだから。』

直ぐに自分の家へ往つて見ると、果して手紙が四本來て居つた。

（十九）

初めの三通には返事の無い所以を尋ねて來て居るが、其後の一通には自分の今の生活の樣子を聞き知つたので父が自ら近々巴里へ會ひに來るとの事である。

自分は常に父に對ッては非常の尊敬と情愛とを有って居るので暫時旅行に出掛るから豫め何時來るか知らして貰ひたい。此方でも繰合してお目に掛るやう歸つて來るからとの旨を不取敢答へて、家の者に田舍の所書を渡し、Cの印のある手紙が來たら直ぐ持て來るやう言ひ置いて、ブージバルへ立歸つた。

露子は庭の技折門に立て待て居て、極不安心な面色に自分を見た近寄ると兩手を自分の頸に掛けて『卿おてるに逢つて？』

『否。』

『大層手間が取れた事ね。』

『老父から澤山手紙が來て居て返事しなくちゃならなかッたものだから。』

五分も經たぬにお夏が息急き切て這入ッて來た。露子は立上つて、何か耳、語いたが、お夏が去ると自分の傍に坐つて、

『何故私を騙したの？　卿おてるの處へ行つたんぢありませんか。』

『誰が其様事をいつた？』

『お夏が。』

『何故他が其を知つて居る。』

『跟けて行つたんだもの。』

『お前が吩附たのかへ。』

『エ、、四月も他所へ出ない卿が巴里へ往らつしやるには餘程深い仔細がなけりやあらんわ。夫に卿の上に危い事でも出來ちや大變だし、ひよつと又氣が變つて他の婦人に乘替る意ぢやないかとも思つたの。』

『子供だあわ。』

『まあ安心したわ。卿が爲た事は解つてるから。併し卿がお聞きなすつた事は未だ解らないの。』

自分は露子に父からの手紙を見せた。

『私が尋ねてるのは此ぢやないわ。卿は何故おてるの許へ行つたんです。』

『おてるに會ひにさ。』

『嘘よ、夫は。』

『馬は少し善くなつたか、シオールだの寶石は尙要るかつて尋ねに往たのさ。』

彼は一寸顏を赧めたが返事しない。

『お前が馬や何か奈何したつて事を始めて聞いたよ。』

『夫で卿怒つてるの？』

『金が要るのに僕に相談する事へ氣が付いてくれないとすりや腹も立たちやないか。』

『私等の方では婦人が少しでも愧を知つてりや情夫に金を出させるなんて事は爲ず、出來る丈は自腹を切て立て引くが當然なんです。卿が私に惚れてるつて事は私もよく知つてるわ。併し卿は私の樣な者との間の戀は何の位罪いもんだか來だ解らないの。早晩卿がお金が無くなるか、飽きて了うかしたら、ついと退いて、跡で此戀は全で手管仕事だつたとお思ひかも知れやしない。おてるなんて何でも饒舌つて了うんだもの、眞面に仕樣がありやしない。私馬が有つたつて何の用に立ちます？賣つて了つた方が得ぢやないの。寧使はん位なら賣つて了つて馬の飼料丈でも節約する方が氣が利いてるわ。若し卿妾が可愛けりや、妾や餘計な事は頼みやしないから、馬がな

からうが、ジョールがなからうが、ダイアモンドが無からうが、同じ樣に可愛がつて呉れりや可いんだわ。』

言ふ事が徹頭徹尾自然であるので聞いて居る中知らず涙含んで來た。自分は彼の手を緊と握り締めつゝ

『だが露子早晩立引たのが僕に知れる。知れたが最期僕は許さんつて事は解つてるだらう。』

『何故？』

『何故つて。お前が僕を思つてくれるのは嬉しいが、其が爲に半襟一掛でもお前の身を剝ぐ事は僕は能爲んのだ。若しお前が金が無くなるか、飽きた時に他の男と住んで居たら這麼事はあるまい、などと假令一分間でも僕と一緒に暮したのを悔まれるのが可厭だ。四五日の中に馬も肩掛も金剛石も戻つて來る。空氣が生命に必要な通り、お前には皆必要の素物だ。如德言

ふのは馬鹿かも知れんが、依頼お前は飾の無いより派手な方が良いよ。』

『そんなら卿はもう妾が可厭になつたのね。』

『馬鹿だなあ。』

『若し卿妾が可愛けりや、妾には妾の流義で慰れさして置きさうなもんぢやありませんか。夫れに卿は妾が必ず贅沢しなけりやならんもの、私にくつ着いて居りやお金を費はなけりやならんもの、樣に思つて居るんだわ。卿は戀の證據を受取るのを愧かしがるのね。卿は早晩私を棄る事のある事を考へて、慾を離れて居るッて事を見せようとして居るの。夫も良い わ。間違ぢやないのね。併し私はもッと以上の望があるんだものの。』

露子は起ちたさうな態度を爲たので抱き添へてやりながら、

『僕は唯お前を怡ばして僕の事に就ては些も不足のない樣にしたい。其ッ限さ。』

『卿別れる意？』

『何故、誰が此中を別れさす事が出來る。』自分は叫んだので、

『卿の分限通りにして暮させやうとするのを卿は可厭がつて、却つて私を素の通にして暮させやうとなさるのね。前の私の暮し方の樣に贅澤を爲せて置かうといふんです。然して御互の生計向、從つて心の置所を大きく差異へた儘にして置かうといふんですわ。可哀想に、私は慾も得もなし、二人の有を二人で使つて暮して往かうといふのを眞個にせず、依樣昔しの儘の馬鹿らしい事を考へて、地道にさへ暮して居りや、結構にして居られるものを花火線香か何ぞの樣に、パッと使つて跡

を文なしにならうといふの。幾ら私が馬鹿だつて、馬車や金剛石と卿の情とが載べ物に出來ますかね。心籠めて慕ふ物が無けりやこそ滿らん物も大切でさね。眞個の戀の味が解りや何だつて彼だつて欲しくも何とも無いもの。其麼物が有つたからつて、私がどれ程悅ぶと思ひます？卿は私の借金を拂ふ。財産を棒に振つて、私を園ふ。何時迄續くの？其で高々二月か三月でせう。其期にあつてから今私のいふ生計が爲たいからつても既う追つ付きやしない。一文なしなら何から何まで私の御厄介さ。夫が恥を知つた男に出來ますか。今で見りや卿は年に三四千圓のお金は入る。地道にして居りや立派に暮せまさあね。私にも倘不用物があるから、全然夫を賣ると年一千圓位は入つて來る。夫で小潔洒した小さな家を借りて、二人で暮して、夏になつたら田舍へ往く。尤も如德家でなく、眞の二人が這

入れる丈の家を借りて。ね卿は誰の厄介になるでもなし、私も誰に氣を揩く人もなし、夫程結構な事は無いぢやありませんか。卿若麼事があつても決して蔷の泥水へ歸しちや可厭ですよ。』

自分は返事が能ず感謝と愛の涙が眼一杯になつて、知らず、我身を露子の腕に投げ掛けた。彼は語を續いで。

『卿に知らさずに皆整然として、借金も濟ましし家も借り、十月になつたら巴里へ歸つて、萬事を片付けやうと思つてたの。所がおてるが皆お喋舌り爲たから、後で得心して貰ふ代に、前以て相談して置くのよ。私が可愛けりや承知するでせうね。

斯迄の愛着拒び事は我には到底能ない。で熱心に其手に接吻し、

『お前の言ふ事なら何でも。』

と玆に評議一決。彼の目論見に從ふ事になると、悅ぶの悅ばひの躍るやら唄ふやら。新たに住むべき極質素な家を心の裏に描き出して、何處にしやう、甚麽間取が好からうまでの相談。

如斯すれば二人の中は愈近付いて來るに違ひない。よし、自分は自分の爲べき事を爲よう。と直ぐに自分の一生の方針を定めて了ッた。先づ我が家事を所理して、母から讓られた收入は露子に移す事にした。是なら大抵立て引かれる額と出す入らずになるだらう。夫でも尙父から來るのが貳萬五千圓殘るから、假令甚麽事になッて來ても生活向には不足はない。但し露子に言へば肯かぬのは知れ切てゐるから、之は默ッて爲て了ふ。此收入は家賃なので、家は曾て見た事もない、唯知ッて居るのは、父の知合の狀師が三ヶ月目に受取證書さへ送ッて遣れば三百圓宛渡してくれるといふ丈である。

露子と巴里へ家を見に來た日、自分は狀師の許へ行て、此收入を他人へ移すには奈何すれば可いかを尋ねると、先生僥が破產したものと鑑定し、何故其麽事を爲るかッて根問を掛る。自分も移すとなれば早晩其名を明さずばならん事と覺悟したので、寧直ぐに實情を打明けたが可いと、淡泊に遣付けると、彼は知人とし、狀師として之を拒むの權あるにも拘らず、一言も言はず、巧く遣つて呈げますつて引受けてくれた。が、自分は父に對しては極々秘密に取扱ふ樣に賴んで、露子と一緒に又家を見歩行いた。露子は此間おてるの許へ行てお說法を聞くよりはとジュリーデュプラーで待て居たので。

見る家〳〵露子は高過ぎるといふ。自分は粗末過ぎると思ふ。到頭巴里の町端れに一軒家を見付けた。後には美しい小な庭があつて、近所から內を見らるゝ程に低からず、さりとて內

から外の景色を見る邪魔になる迄に高くもあらぬ塀で圍はれて居て、總てが望んだよりは上等であるので、愈夫と極はめ、自分が轉宿する旨を我が家へ言ふて行つた間に、露子は代理商の所へ駆附けた。所が露子の友人が既う丁と、露子の爲に恰度彼の望む通りの事を吩咐けて行つた後との事で、彼がプロヴアンス街へ來た時には大悲悦のはく〳〵物、代理商は全部器具を渡される事なら、露子の借金一切拂つて、其受取證を此方に渡す上に、八千圓現金で渡さうといふ。現に一萬二千圓の借金があるのだから、器具を賣れば二萬圓已上になるものと見える。

御互に所謂結構人、殊に兩人の戀の炎に逆上せて、新たに立てた計畫も何の障碍なく出來るものと考へ、良い事嬉しい事ばかり語ひ合ひつゝ、はしやぎ返つてプーヂバルへ歸つた。

一週間經つて、丁度晝食を喰つて居る時お夏が來て、自分の從僕が逢ひに來たとの事に、通して見ると、

『大旦那樣がお光來になりまして、旦那樣のお室で待てお在になりますから、直ぐにお歸り下さいますやうに。』

如樣事をいふて來るに聊かの不思議もない事だが、之を聞くと同時に、露子と自分とは顏を見合せた。互に一悶着と思つたので、露子が未だ一言發さぬ中、自分は彼の心に答へて、其手を把りつゝ『心配せんでも可い。』と言ふと彼も自分を抱きつゝ呟くやうに

『成る丈早くお歸りなさい。私は密に出て待つてゝよ。』

『權助、お前一足先へ出て、僕は今に來るからッて親父樣に然言へ。』

、二時間の後自分はプロヴアンス街へ歸つて來た。

（三十）

父は部屋着を着て椅子に掛り書寫を爲て居たが、自分の這入る途端、吃と我が顏を見た其眼の光に、普通ならぬ叱言の出ひて、

『父君、何時光來ました。』

『前宵。』

『直と此家へ光來ッたのですか、平素の通。』

『ウム。』

『お光來の節に不在でして誠に恐入ります。』

父の顏の冷かな中に現然見うるお説法は、即刻にも初まる事と思ひきや、書き了へた手紙を封じ、櫻助に渡して投れさせた後、二人限とおるのを待て、父はやをら顏を上げ、爐に凭れな

がら口を切ッた。

『喜太郎、今日は大分面倒な話があるぢや。』

『ハイ。』

『組て打明けますか。』

『平日でも然ぢやございませんか。』

『お前が後藤露といふ婦人と一緒に住ッてるのは眞實か。』

『ハイ』

『此婦人は以前何をしてゐたか知ッてゐるのか。』

『園物です。』

『今年乃公と妹の許へ來るのを忘れたのは此婦人の爲かな。』

『ハ、然でございます。』

『お前は餘程此婦人に惚れて居るのか。』

『其は貴君の方へ參る義務怠欠いたといふのでお解りにな

りませう。但し今年參らなんだのは誠に惡うございましたから、精願御免なすつて。』

父は如慇明らさまに返答を爲やうとは思つて居なかつたに違ひない。勝手が違つたらしく暫時考へる樣だつたが、

『何時迄も其麼事をして暮して居る事は能んといふ事は勿論お前考へたらうね。』

『夫は能んかも知れませんが、也とも考へた事はありませんので。』

『併し、』と調子は嚴めしくなつて、『結局乃公が許さんといふ事は考へたらう。』

『私は不正直を働いて先祖の位牌を汚し、家名を傷けん限りは、如慇して暮して居れる事と思ひまして、幾らか安心もして居たのでございます。』

情ほど怖ろしい敵は無い。露子と別れぬ爲には奈何な事、父に對しても何等ふのを恐れない意。

『夫なら、今日只今から改めなさい。』

『何故でございます。』

『お前は濱さないと思つてゐる家名を濱し居るからぢや。』

『有仰る事が少し解り兼ますが……』

『フム、言ふて聞かさう。有ちたけりや情女も拵へるが可い。名譽を重ずる人間なら、圓つて置く女には如何してありとも金を拂はなけりやならん。拂ふが宜しい。併し婦人の爲に最も神聖な事を忘れ、乃公の居るやうな世事に遠い靜かな地方へ迯、不面目な噂を傳へたり、私がお前に傳へた名譽ある有馬の家名を濱すに於ては、一刻も許されません。』

『ね父君、貴君のお聞きになつて居るのは少し間違つて居ま

すよ。私が露子に關係して、他と一緒に住居して居る、是れ極當然の事で、何も私が貴君から讓て戴いたお名前を露子にやつて居るのぢやでございませず、私は自分の能る丈の金は他の爲に費つて居りますし、だからつて借金は拂へませず、つまり、私の今の狀態は貴君が今有仰た事をいはれる樣な事はでございませんので。』

『否、親といふものは、何時でも子を邪道から救出す權利がある。從來にお前は害を爲なかつたにしても、是から爲るぢや。』

『否、父君！』

『私はお前よりは注連の數を潜つて居るよ。眞正に純潔な愛情は極々清淨無垢の婦人でなければありはせん。何のマノンにも必然グリューは付いたものぢや。夫に時代が違ふ。人間實からあらんものなら、齡をとる必要が無い。今日限りお切れなさひ！』

『仰に背きますのは誠に恐入りますが、夫は何うでも出來ません事で。』

『否、是非共然させます！』

『父君、生憎今日既う園者を投り込む所は無くなりました。假令ありましても、若し貴君が他をお遣りになれば、私跟いて參ります。然すりや詮方が御座いますまい。無論私が惡いのでございませう。げれども、私は他と切れるなら生きて居る瀬がありません。』

『コレ、壽太郎、まあ眼を開けて、な、お前に言ふて聞かすのは誰ぢやちう事を考へるが可へ。お前の父ぢやぞ、生れるときから今日迄可愛がつて遣た父ぢやぞ、お前の幸福になる事ばかり祈つて居る唯一人の父ぢやぞ。誰とでも行當り放題くつ付い

た婦人と、夫婦同樣にして暮すが、名譽と思ふか。』

『併し父君、誰も既う手出をせんけりや關はんぢやありませんか。他が私を愛して、其愛の爲に、又私の愛の爲に、他の生計向が全然覆つて了つて居りや、關ふ事ないぢやありませんか。他は今既う別人です。夫でも可かんといふ理屈はありますまい。』

『するとお前樣は壞れた婦人を救ふて廻るのが名譽ある男子の天職と考へなさるのかね。神が如慈仰山な目的を人間に與へ、人の精神には如慈事に熱沖する餘地があるとお前樣考へなさるか。夫で救ふた末がどうなります。お前樣が今日言ふ事を、四十になつて考へたら何う考ると思ひます。幸に、餘り甚い缺點にもならず、四十になつて嘘へる丈の資格があれば、必然今の戀を嘘ふに違ひない。若し乃公がぢや、お前の時分に確乎して名譽を重んずる事をせず、お前樣の樣な考を有て、情の

之く儘に暮して來て居たら、お前樣といふものは今日甚麼だらう。な、壽太郎、其を考へて、既う其麼馬鹿を言はずに其婦人と切れて呉れ。お前の父が頼ひから。』

自分は何にも答へなんだ。

『壽太郎、佛になつた母に代つて乃公が言ふぢや、切れて了へ。思つたよりは忘れるに苦はないものぢや。お前が關係して居る理由は全で根底がないのだから。お前も二十四といふ年齡なら、少しは將來も考へるが可、何時迄も他に惚れて居れる者ぢやなし、婦人も何時迄然爲て能居るものか。若氣の至で、二人ながら戀を買被つて居るので、お前は出世の道を塞いで終つてる。何一歩出して見ろ。乘掛けた船は棄る事は出來ず。到頭若い時に爲た事の爲に、一生苦まにやならん。ザ、巴里に居らんで、一月か二月乃公と妹の所に逗留するが可。靜かな家庭の情愛

の中で休んだら熱は冷める。此も病氣ぢやからな。其間に婦人も慰めは出來る。遺作もない事、他の情夫を拵へりや夫で可のぢや。でお前が、家父も棄てゝも可い。家父の愛も關はんと迄いふたものが、誠は甚麼物だつたつて事が解つて來れば、ようまあ親父が遠方態々來て捜出して助けて呉れた事だ。ヤレ良かつた、難有かつたと、其時になつて思ふに違ひない。サ、壽太郎、乃公と一緒に立たう、否か。』

若し此が他の婦人なら、父の云ふのは道理だが、相手が露子では無理としかいはれない。併し父の詞の調子が餘り親切で、頼む樣なのに、自分も口應は出來ず默つて居ると又、

『何うだ。』と聲は擅へて居る。

『ハイ、私は、到底思ひ切て、お約束は出來ません。貴君の有仰るのは私の力に及ばん事でございます。』父は膝を立てゝ身を切

りに搖つて居るを、自分はまた語を繼いで『貴君は此關係の結果を餘り大仰にお考になるのです。此戀は私を邪路に入らせるどころか、却て正しい方に向ける力を有つてゐます。戀は、甚麼婦人が授けるにしても、男を善くならせるものなんで、貴君が露子を御存知なら、些とも酷くないつて事がお解りになるんですがねえ。其高尚な事、婦人の中でもあの位な女はありません。全く無慾な事といつたら夫は人間ぢやないです。』

『其樣に高尚で無慾な女でもお前の財産全部を貰ふんだな、お前が母から貰つて此頃其露とやらに遣らうとなさる二萬四千圓といふものは、可かい、お前の財産全體なんだぞ。』

思ふに父は此を最後の脅迫に取つて置いたのだらう。が自分は前の樣に親から手を突いて頼まれるより脅される方が餘程受けよくなつて、此方も強く出られる。

『私が那の金を與るつて事を誰にお聞きでした。』

『乃公の狀師ぢや。正直な人物は乃公に聞かんでは如何事は爲んぢやテ。夫はまあよし。乃公が來たのは貴女の爲にお前が一文無にならん爲ぢやから、北方さへ方が付けば良いので、他の事まで關つては居られん。お前の母が死んで、財産を遺して置たのは、紳士らしく暮させるが爲で、情婦の爲に遺ひ果させようとの爲では無ひわ。』

『露子は此讓渡は些も知らんのです、全く。』

『なら何故くれて與る。』

『貴君は鬼の樣に思つて居らつしやいますが那の露子は私と一緒に暮したい計りに有品全體賣て犧牲に爲て居るんですからな。』

『お前樣は犧牲を受て居るんだね。椿姫から犧牲を受けるなんて、お前樣は何といふ人だらう！さあ其で深山だ。斷然お切れなさい。つい今乃公はお前に頼んだ。が、今度は頼まぬ。命令ぢや。其廢破醜恥の行爲が有馬一家に在てはなりません。只今荷物を拵へて乃公と一緒に立つんだ。』

『父君、御免下さい、私は立ちませんから。』

『何故です。』

『私も丁年已上で既う命令に盲從する齡ぢやございません。』

有馬の父も此には苦くなつた。

『宜しい。其なら私にも考へがある。』

父は呼鈴を鳴らして樓助を呼んだ。

『乃公の荷物を巴里旅館へ持て行け。』

言ひ棄てに室に這入て荷物を荷替へ、出ようとするを自分は追つて、

『父君、露子を苦めるやうな事は決して爲ないといふ事誓つて下さいね？』

父は立停つて、蔑如果たるらしく我顏を見つゝ、

『お前は狂氣だね。』

手當り荒く室の戸を閉てツイと出て行た。

自分も直ぐに二階を下りて馬車に飛乘つた。行先はブーヂパール。

露子は果して窓に憑て自分を待て居たのである。

（三十二）

『私待遠だッたわ。まあ、卿蒼い顏！』と兩手を我が頸に投げ掛けた。父との會見の模樣を話すと。

『其廢事ぢや無いかと思ッてたの。權助が父君が光來ッたッて來た時何か大不幸でも報せに來た樣に、私樣へ上ッてよ。卿の離儀の原因は皆私なんだから……私と切れて、父君と仲好くなされば其方が多分卿も結婚でせうよ。だが父君だッて卿が必然情婦を拵えるつて事は知ッてらつしやるんだから、まだしも私が情婦になッて幸福だとをもッて下さらなけりやならんのだわ。私は惚れて居るしさ、卿に出來る丈しかお金も使はさないんだもの。で定めてある將來の生活方を話して？』

『ウム、其奴が一番お氣に障つたんだ。其れで以ッて何の位二人が惚れ合ッてるか解ッたものだから。』

『夫ぢや何う爲れば良いの。』

『如態して離れずに居るさ。暴風雨は獨りで忍ぶよ。』

『忍まなけりや仕方があるまい。』

『父君は其儘、ではお濟しなさるまいと思ふわ。』

『何う爲る事が出來る？』

『私が其を知つたもんですか。息子だもの、言ふ事背かさうと思へば甚麼でも能るわ。まあ露子ッて女は前に云々だつて言つて、また隨分無い事も作つて下さるだらうし、然すりや卿も切れるかも知れないわ。』

『お前僕がお前を愛してゐる事解つてるだらうね。』

『エ、知つてますとも、だが妾は早晩卿が父君に從ふだらつて事も、父君の有仰る事を眞實にして其つ切におなりだらうつて事も知つてるわ。』

『否、其は無い。反對だ。私の言ふ事を父君に信用させるんだ。誰か友人が父に問進ッた事を知らして夫で父が懷つたのさ。』

『併し父君と喧嘩なさるのは私何より可厭なのだから、今日

は一日泣て、翌日巴里へ行て在らつしやい。父君の方でもお考へなすつたらうし、多分聞く治まるだらうと思ふの。何しろ頭から父君の心持に逆つちや可けないから、幾分か讓る風をして、左樣甚く私を思つてる樣な顏を爲ない樣に。然したら大抵此儘で得心して下さるわ。ね、氣を落さないやうに。卿、甚麼事が起つて來ても、露子は必ず他へ氣は移さないんだから是丈は安心して。』

『お前其を誓ふかへ。』

『私誓が要るの？』

命任せた戀人の口から說き勸めらるゝ快さ！兩人は一時も早く將來の計畫を實行しかければならぬかの如く、終日其を語り暮した。但し時々刻々、今にも何か事あるかと心安らず待て居たが、何の報告もなく日は暮れて了つた。

翌る日十時に家を出て十二時に旅館に着くと父は不在。自分の家へ往たのかと、歸て見たが誰も來ぬといふ。狀師を訪ねた。茲も人なし。旅館へ歸つて六時まで待たが父は歸つて來ないので又、ブーチバルへ歸つた。

昨日の如く我を待つにはわらで、夏ながら天氣の加減で火を焚きながら其前に、自分が椅子の傍まで歩み寄るをも知らず。深く物思ひに沈でゐる露子。自分の接吻に驚き覺たかの如く飛上つて、

『まあ吃驚した事。』と我を視つゝ『父君は？』

『會はずだ、何うした事か知らん。旅館には居ず、居やうと思ふ處何處にも在ないんだ。』

『然なら明日又往らしやいよ。』

『父から呼びに來るまで待たちかと思うんだ、僕の爲べき丈は手落なく爲たんだもの。』

『否十分ぢやありません。今一度訪ねて往かなけりや可けませんよ。是非明日。』

『明日でなけりやならんて何故だ。他の日でも可からうに。』

『何故ッて、』と露子は此問には少し顏を赧めた樣だつたが、

『何故つて毎日の樣に行けば餘計熱心に見へて、夫丈早く許して下さるでせうからさ。』

其日終日露子は斷ぎ返つて、何か深く考へて居て、何でも同し事二度言ねば返事を爲ない。所以を尋ると一昨日からの事で案じられると計り。夜中安心させ樣と種々努めたが無益で、翌日朝怖しく急き立て、何と言つても聞き入れぬ剛情さ、何うしても自分に解らなかつた。

又父は不在だか手紙を殘して居る。

『今日若し来たらば四時迄待たるべく、若し尚歸らずは明日晩餐旁々来るべし、是非面談致度候』

指圖の時刻迄待ッたが父は歸らぬので又ブージバールへ歸つた。

前宵は露子は酔いで居た。今晩は又熱病にでも掛つたやう、甚く氣の逆上て居る風で自分を見るが否飛付いて頸にしがみ着いたが、多時我が腕に持りつゝ泣き沈んで了つた。其悲の餘り唐突で餘り劇しきに、然くまい事か、したゝか胸を衝されて色々理由を尋ねても明確した答はせず、婦人が眞實を告げまいとする時に熟くやる術の、驅豊絵に言ひ拔けて計り。

稍落着いた時分、今日の結果を告げて父の手紙を示し大抵之で吉凶は知れる旨を告ると、彼は又忽ち泣き出して涙滂の如く、神經に異狀でもあるではないかと思ふ位であるので、早速お夏を呼んで床へ寢させたが、彼は一言も利かず只泣きに泣いて、我が手を把つては絶間なく之に接吻して居る。

自分の不在中誰か来たのか、又は手紙でも来て、如何なつたのではないかと、お夏に訊ねても、何にも来ぬといふげれども、昨日以来、何か起つたに相違ない。殊に、露子の置すのが何よりも氣に懸る。

暮れ方になると稍靜まつて、自分を寢臺の下に坐らせつゝ、幾度となく、

『私は世座に卿に惚れてるだらう！』との旨を繰返し〳〵言ては笑つて自分を見たが、笑つて居ながら眼には涙のあるを見ると故意なに違いないので、手を替へ品を替へ其理由を聞かうとしたが、漠然とした事ばかり云つて居て、終には到頭自分の腕に倚つて寢入つて了つた。但し其眠は體軀を休めず、却

て疲らせる樣なもので、夢の中にも煩悶絶えぬらしく、時々叫ぶ、跳起きる、起きて傍に居る我を見ると、其度何時迄も彼を愛する旨を誓はせる。此調子で終に夜の明ける迄、自分は孤に魅まれた樣で更に解らず終ひ。東が白んでから彼は昏々として深き眠に入つた。此二晩一睡も爲あいのだから左もあらう。其安心の眠も束の間、八時には疾や覺めて、自分が既う起きて居るに心付くと四周を眴しあから、

『卿既う往らつしやるんですか。』と泣出して了う。

『否』と我は其手を把りながら『僕は尙と寢さして置く意だつたんだ。尙早いよ。』

『何時に卿巴里へ往くの？』

『四時。』

『其麼に早く？だが其まで茲に居るんでせう。』

『無論何日でもぢやないか。』

『ア、嬉し！御飯喰べませうか。』言ふ調子は宛で氣脫の爲てゐる樣。

『お前が喰べたけりや喰べやう。』

『而して卿往く時迄私を可愛がつて呉れて？』

『無論、失れに能る丈早く歸つて來るよ。』

『卿歸つて來るの？』と疑せ殺けた顏に淋しく我を見入りつつ。

『當然だ』

『ア然う、卿今晩歸つて來るわね。私平常の通待つてようよ、卿可愛がつて呉れるでせう、平常の通り。』

此麼は極潛めた調子で、必ず何か忘れ難い悲しい考が潛んで居るやうで、刻々彼が眩暈でも起しはせぬかと思つた位。

『コレ、お前病氣なんだ。是ぢや打放て置て行く事は能んから。父の許へ手紙を遣て斷らう。』

『否々。夫は可けないわ。』とけたゝましく『父君は又、會はうと有仰る時分に引留めたてッて私をお恨みなさるから是非行かなけりや可けません。必ず！夫に私は病氣ではありやしない。何でも無いが悪い夢を見て、尙眞箇に眼が覺めないのよ。』

此から露子は極快活らしく爲て、既う涙も見せぬ。出立の時刻になると、歩行けば紛れるだらう、新らしい風に當れば良いだらうが三分、成丈一緒に居たかつたが七分で、停車場迄一緒に來て呉れないかつて輕むと、露子は承知して、歸途に淋しくない樣、お夏を伴れて出掛けて來た。自分は幾度往くを止めやうと思ッたか知れんが、直ぐに歸るとの希望と、殊に父を怒らせる恐怖とに驅られて、終に列車に乘込んだ。

『ぢや今晩まで！』

彼は答へない。

實て彼は此言語に答へなんだ事が一度ある、其夜C伯がお忘れにはなりますまい泊ッた。殆ど自分も忘れて了ッた程往昔の事。もし自分に何等かの疑惑があれば夫は露子が自分に不貞な爲ではなく自分が悪いんだと思ひ返して、巴里へ着くと直ぐおてるの家へ急いで往つた。彼の快活な調子なら露子を慰める事が能やうから輕んで田舍く往て貰ふ意だつたので。

案内を請はずに直と這入るとおてるは化粧して居る處。

『ア、！』と彼は心配らしい顏色で『露子樣卿と一緒？』

『否』

『露子樣奈何して居て？』

『何だか健康が悪いんだ。』
『露子様今晩来ないの？』
『来る筈になつてるのかへ。』
おてるは顔を赧めて、何か頻りに行どまりながら、
『否、唯貴君が巴里に被在からさ。露子様後刻から来る筈ぢや
ないんですか。』
『否。』
とおてるを見ると彼は首を低頭れた。何か約束でもわるか
尻の長くなるのを可厭がる風が顕然見へる。
『おてる様、実どころか僕は、若し貴女今晩用事が無ければ、露
子の許へ泊り掛に行て、相手を爲て貰ひたかつたんだ。今日の
様に氣分の悪さうなのを見た事は從来に無いから、病氣にな
るんぢやないかしらと思ッて。』

『今晩饗宴なんだから生憎だ事ね。明日往きませう。』
殆ど露子同様考へて居る風だッたので、早々おてるの許を
辭して父の許へ來ると、先づ眼を定めて確乎と自分の心を讀
む容子。
『お前が二度來たので大分安心した。乃公も考へたがお前も
其方で考へたと見るな。』
『父君、貴君のお考は奈何樣りましたですか。』
『噂を餘り大層に考へ過ぎて居たので、少しは手軟かに爲や
うと、ま、早く言やあ如慫ぢや。』
『何ですつて父君。』と歇禁せず叫んだのである。
『若い間には誰しも情婦は在るもんぢや。此頃聞き込んだ所
で見ると、乃公は他の婦人に關係させるより依樣露子の方が
可と思ふのぢや。』